# 早稲田大学本庄高等学院
# 2023年度　学校自己評価・関係者評価

2024.3.31
早稲田大学本庄高等学院

注釈：以下の内容については、担当教員が該当項目について記載しているため、多くの箇所で内容の重複する部分がある。

０．アフターコロナにシフトした2023年度学校運営

2023 年度は、アフターコロナにシフトした年となった。とはいえ、完全に感染に対する不安がなくなったわけではなく、6 月 6 日（火）7 日（水）に、校内の新型コロナ感染拡大により休校措置、6 月 8 日（木）２学年閉鎖、3 年生 2 クラスの学級閉鎖措置をとっている。また、インフルエンザを含め、感染拡大に対する注意喚起を何度も行った。

本校では2022年度の実績を受け、2023年度可能な限りコロナ禍以前の生活に戻す努力を行った。大きな行事である、体育祭・稲稜祭（文化祭）は概ねコロナ禍以前と同様に実施することができた。宿泊活動は制限なしに実施した。また、修学旅行はまだ海外に展開することが難しいと判断し、昨年同様国内ではあるが２コース（北陸・関西）に分けて実施した。学校説明会、保護者会もコロナ禍以前に戻し、対面で実施できた。

一方で、コロナ禍中に培われたオンラインコンテンツやノウハウをうまく利用することによる新しい動きも昨年同様行った。対面の授業とオンラインコンテンツを併用することにより、授業がわかりやすくなる、復習しやすくなる、さらには欠席した生徒に役立つことにつながる。学校説明会では、オンラインであればわざわざ来て参加する必要がないため、海外の受験生も含め、大幅に参加者が増加した。一方でオンライン説明会は気軽に参加できるため、説明会に参加した中でどのくらいの受験生が実際に受験するのか、予測がしにくくなった側面もある。実際にキャンパスを訪問しないまま入学してしまうことが、学校選択のミスマッチにつながる懸念もある。説明会の一部を夜にオンラインで実施することにより、生徒のみならず保護者もコロナ以前には参加できなかったプログラムに参加できるようになった。このことは、保護者の学校理解につながっている。

このようなコロナ禍で得たオンラインコンテンツやノウハウを活かすことにより、ポストコロナにおける次世代の学校運営につながるものと考える。

１．教育理念・目的・人材育成像

早稲田大学は早稲田大学教旨に示された 3 つの建学の理念、すなわち「学問の独立」「学問の活用」「模範国民の造就」に基づき、教育・研究を展開している。その上に、2000 年に「21 世紀の教育研究グランドデザイン」を発表し、08 年には創立 125 周年を契機に「Waseda Next 125」を策定して「早稲田から WASEDA へ」をスローガンに定めて広く世界で活躍する人材の育成に努め、グローバルユニバーシティを目指すこととした。さらに、創立 150 周年を展望した「Waseda Vision 150」を 12 年 11 月に策定し、「アジアのリーディングユニバーシティ」として世界に貢献する大学であり続けるためのビジョンを社会に公表し、目指す方向性を明らかにしている。

早稲田大学本庄高等学院（以下本庄学院と略）は早稲田大学創立 100 周年を記念して 1982　年に男子校として開校した。2007 年に男女共学となり、2012 年に現在の校舎に移転した。全国各地および世界各国から、将来早稲田大学を目指す意欲的な生徒を集め、自由と自立の校風の中「自ら学び、自ら問う」という教育方針のもとで「進取の精神」に満ちた活力ある生徒を育てることを教育の基本としてきた。

加えて、「Waseda Vision 150」に関連し、2012 年 11 月、「本庄高等学院の将来構想」を発表した。すなわち地域の特色を生かした「森に想い土に親しむ」教育をいっそう発展させた、教科横断型の教育・研究活動を通して、社会の各分野で活躍できるリーダーを育成することを目的としている。

本学院は早稲田大学での一貫した教育体系の中に位置づけられ、卒業生全員が早稲田大学の各学部に進学すると規定されている。したがって本学院の目的は、早稲田大学教旨、「Waseda Vision 150」、そして「本庄高等学院の将来構想」に基づいた教育・研究活動を行なうことである。生徒に対しては、知的関心を高め論理的な思考力、豊かな感性を育成し、さらに大学における専門的な学問の分野も模索させ、また大学での幅広い本格的な学問研究に必要な、基本的な学力・体力を養成することを目指している。その目的は本年度においても継承されている。

## ２．教育活動

### 2.1 授業

#### 2.1.1　授業運営

本年度もコロナ禍での経験を活かし、安全を考慮した上で、できる限り対面の授業を実施した。しかし、秋には一時的にコロナ罹患者が増え学校閉鎖や授業の切り上げなどの措置を行った。通常授業中でもコロナ感染等で登校できない生徒には、教科担当者ができる限りの学習指導を行い、学力低下を防ぐ努力をした。

（ア）国語

2023 年度も多くの授業でコロナ禍以前のような音読（群読）や発表を実施できた。また、PC、iPad、書画カメラ等のデジタル機器を積極的に用いた授業への取り組みを本年度も継続して行なった。

さらに、国語の授業内で生徒に取り組ませた公募作品（大阪経済大学　第 23 回高校生フォーラム　17 歳からのメッセージ）が上位に入賞するなど、めざましい結果を残している。毎年発行している「国語科文集」は主に授業で取り組んだ作文を載せているが、今年度も多くの優れた作品が寄せられた。

（イ）数学

2023 年度も一年生の春休み明け数学学力テスト・数学Ⅰの一学期中間試験に対して追試・補講を実施した。また、昨年度同様、自学自習 LA の制度を導入し、専任教諭・非常勤講師に加えて大学生による質問対応の時間を設け、手厚いフォローを行なった。自学自習 LA は対面および Zoom による形で実施し、多くの生徒の利用があった。

（ウ）理科

理科の実験実習においては共同作業、ディスカッションが不可欠である。引き続き衛生管理に留意しつつ、従前通り前期のような取り組みを各科目で充実させた。実験実習に伴い、レポート作成の方法、添削を行い、生徒のアウトプット技術の向上も図っている。授業中のディスカッションについては生徒の方もここ数年よりも積極的に発言しやすくなっている様子が見られた。

（エ）地歴公民

「自ら学び、自ら問う」という学習基本方針に従って、主体的・能動的な学びを促すことを重視する一方、附属校として、常に学部における学びとの結びつきを意識しながら授業を展開した。以下、歴史分野、地理分野、政治・経済分野、公共分野に分けて振り返る。

【歴史分野】

単に出来事の時系列や人物の暗記を求めるのではなく、現代という時代が、過去の長い歴史の展開の結果であることを意識させるよう心がけた。特に現在の動向に関連する歴史的事象についてはそれを強調し、受講生自らが「歴史を学ぶ意義」について考えることができるようになることを目指した。地図・人物・建築物等の写真をはじめとする視覚教材を積極的に用いることによって、受講生の想像力を掻き立て、歴史に対してより親しみを持たせるような工夫も行った。

【地理分野】

既存の高校地理の学習範囲にとらわれず、それまで学んできた他教科での学習内容を可能な限り援用しながら、身の回りの風景や土地利用の成り立ちについて、地理的事象の因果関係を自分の文章で論理的に説明できる能力を養うことを目標とした。また、授業で得た知識が、自分自身の今後の生活における知恵として活かされるような授業を心がけている。

【政治・経済分野】

生徒によるグループワークやディスカッションを取り入れ、主体的・能動的に学ぶ機会を多く設ける努力をした。たとえば、任意の国際問題について自ら論点を設定して全員で討議する授業

を行ったり、労働におけるジェンダー平等の実現に向けて探究する授業を行ったりした。さらに、授業で扱った内容を探求する研究ポスターの制作・展示も実施した。

【公共・倫理分野】
受講者に対して、哲学や正義論に関する高度な内容の文献を正確に読み込む訓練を通して、先人たちが世の中の様々なことがらについていかに骨身を削って真剣に考えてきたのかを知らしめるように努めた。そして、現代に生きるわれわれの務めは、それら先人たちの功績をまず謙虚に受けとめ、それらを参照しながら、最終的には自分の頭で「何がまともなのか」を考え抜くことであるのだということを語った。適宜、グループワークの方法も取り入れて、自分の意見を表明することと他者の意見に耳を傾けることの重要性についても気付かせるように努めた。

（オ）英語
3年間を通じ、スピーチやプレゼンテーションをはじめ自分の考えを相手に伝える機会を適宜設けている。本年度もマスク着用、手の消毒等など感染防止に努めながら相手に伝える活動を実施した。これにより生徒の発表の機会の確保することにつながり、パフォーマンス活動の充実を図ることができた。

（カ）保健体育
保健体育では、保健と体育が繋がるようICTを活用しながら授業を展開した。
体育では、恵まれた体育施設をフル活用し、年間を通じてさまざまな種目に取り組んだ。授業を通じて、仲間とコミュニケーションをとりながら協力することで相互理解が進んだ。また、「する」だけでなく「みる」「支える」「知る」の観点においても体験することで、生涯スポーツを考える時間として機能したと考える。
保健は「生きる力」とつながる、息の長い科目であることを生徒が実感し、生活の行動修正につなげられることを目標にしてきた。知識の獲得と共にさまざまな題材での仲間との意見交換によって、多面的な意見を知り、自己の思考を深める時間にもなった。

（キ）芸術
芸術科の科目は、対面による教員と生徒・生徒同士のやり取りが行われることで、より活発で充実した授業を展開することができる。授業後のアンケートでも、「一般教科の学習に追われる最中、とても良い息抜きの時間になった」と回答している生徒が多数居り、学院生の充実した日々に寄与できていたことがうかがえる。
音楽Ⅰの授業は、1学期には様々な名曲の歌唱、打楽器アンサンブル、ハンドベル合奏に取り組み、2学期には旋律譜に記されるアルファベット（コード記号）の解読の仕方を細かくレクチャーした上で、グループ活動・演奏発表を行った。各班で選んだ楽曲の一部分を、旋律担当・伴奏担当に分かれて、オリジナルの合奏を行った。班の分け方がくじ引きによる男女混合の組み合わせだったため、クラス内の交流を図る良い機会となった。3学期は、個人・グループによる演奏発表を行った。色とりどりの発表が連続し、個々人の努力の成果も実り、生徒たちも大満足のようであった。
美術Ⅰの授業は、本庄キャンパス内のスケッチおよび水彩画、将来の自画像、創作お面、モノトーンによる著名人の肖像画と平面構成の課題に取り組んだ。
本庄高等学院は、クラス単位で音楽Ⅰと美術Ⅰを履修している。そのため、グループワークを中心にすることで自然とクラス内の交流が図られ、一致団結する機会が非常に多く生まれる。生徒たちもそのことを非常に強く実感していることがうかがえ、高等教育ならびに本庄高等学院における芸術科の学びの意義を大きく見出す一年となった。

（ク）家庭
家庭科では、“生き方を学ぶ・生き方を考える”という目的のもと、適切な教材を用意できた。特に、生徒たちの意見交換が進むような題材を取り上げることができた。調理実習は安全に配慮しながら計画通りに実施できた。3年生の選択食文化は少人数授業（20名）であったため、生徒

たちは共に教え合いながら調理することができた。1年生の家庭基礎での実習内容は、焼き菓子、鍋料理（つみっこ：本庄市の郷土料理）、たんぱく質凝固についての調理（カッテージチーズ）であった。調理に対する関心は様々で、学習意欲が低い生徒もいる。そのような生徒に対しどんな動機付けができるかが課題である。又、課外講義として希望する生徒（34名）に、カカオ豆から作るチョコレート（Bean to Bar)を実施した。

感染対策と授業進行の両立は、今年度も難しい課題であった。特に家族・家庭生活に関する分野の学びではディスカッションする際に細かな配慮をした。家庭科は、学びを深めるために多様な価値観に触れることが欠かせない。生徒が感想や意見を発表し、互いに刺激を受け合うという学びが浅くならないよう、今後も工夫を重ねていく必要がある。

（ケ）情報

大学各学部から要望の多い統計解析言語Rを旧課程の「情報の科学」に導入して3年になる。2021年度から1年生に対して新教育課程「情報I」2単位を実施しているが、そこでもプログラミング言語としてRを実施した。Rのオリジナルテキストを使っている。

2022年度の反省として、旧課程では1年次2年次1単位ずつ実施していた授業内容を、新教育課程では1年次2単位となるため、そのまま2学年分を移行したところ、課題に対する生徒負担感と教員の成績評価の負担感が増したことが挙げられる。2023 年度はその反省を活かし、内容を削って精選を計った。

情報科の特徴として他校と異なる大きな側面は、本校の特色である探究活動（卒業論文）と有機的な連携を図るため、アカデミックリテラシー養成およびプレゼンテーションスキル養成に関する内容を強調していることである。

2.1.2　必修科目・選択科目

（ア）カリキュラム

カリキュラムは1年次から3年次まで、各年度32単位構成で3ヵ年96単位となっている。なお、今年度第1学年および第2学年には新課程が適用されている。

- 1年次：芸術科目を音楽履修クラスと美術履修クラスに分け、その他の必修科目は共通に履修する。
- 2年次：「総合的な探究の時間」以外の科目は共通に履修する。「総合的な探究の時間」は、キャンパスに素材を求めた半期ごとの輪講形式の「大久保山学」(2単位）として実施している。
- 3年次：32 単位の構成は、文理共通科目（15単位)、必修選択科目（12単位)、自由選択科目（2単位)、総合的な探究の時間（2単位)、HR（1単位）となっている。文系と理系では、必修選択について科目および科目数が異なる。文系は6科目12単位、理系は4科目12単位である。また「総合的な探究の時間」は、キャンパスに素材を求めた半期ごとの輪講形式の「大久保山学」(1 単位）と、「卒業論文指導」及び「修学旅行事前学習指導」を行う「課題研究」に配分している。

（イ）必修科目

必修科目の授業計画は、毎年、前年度の生徒の授業評価の分析・検討に基づいて作成している。また、すべての教科において年度始めにシラバスを作成し、それに沿って授業を展開している。

第1学年では、主に基礎学力重視の観点から中学校の内容との連続性を意識して展開し、第2学年では学力の充実・発展の観点から構成を考えている。第3学年では大学での教育との連携を意図し、各科目の特徴を捉えて授業を行っている。

授業の基本方針は、わかりやすい授業、探究や思考力、判断力、表現力を高め、生徒が主体的に取り組めるような授業形態、大学への架け橋となる専門的な内容を盛り込んだ授業、社会との関わりを意識した授業を心がけている。具体的には理数教科で学部教育の基礎となる学力の強化をはかるべく、一定の基準に達しない生徒への追試や補習授業を行った。さらに、語学や人文社会科学系の科目では、アクティブラーニングを取り入れた授業も多く、また、プレゼンテーション技術の習得や論文執筆指導を含む授業展開も多くなされた。

最近では、反転授業・ジグソー法などの新しい授業形態を取り入れたものや、複数科目のコラボレーション授業など、新しい授業形態への取り組みも多い。また、各科目の節々で本学院の特色である論文教育を推進するアカデミックリテラシーを意識した授業展開がなされている。

（ウ）選択科目

本学院のカリキュラムの最大の特徴として、3 年生に豊富かつ多様な選択科目を履修させていることが挙げられる。音楽や美術、第二外国語（フランス語、スペイン語、中国語、朝鮮語等）も含む選択科目は、必修選択と自由選択を併せ、文系は 7 科目 14 単位、理系は 5 科目 14 単位を選択することが規定となっている。具体的な内容としては、学部の専門科目の導入的な性格を持つもの、時代に必要とされる力を意識したもの、早稲田の一員ということを認識させるものが設置されている。

（エ）英語能力試験

4 月に GTEC Advanced（3 技能）、9 月に TOEFL ITP 、11 月に 3 年生のみ GTEC3 技能試験を実施した。GTEC3 技能試験を実施する背景は、

① 学院生が自らの英語能力を客観的に知るため
② いくつかの学部進学の際に英語力が資格要件として課されているため
③ どの学部からも調査書と共に英語外部テストスコアの提出を求められていることに対応するためである。

（オ）大久保山学

「大久保山学」設置の趣旨は、キャンパス環境を利用した学習教育プログラムや、学際的かつ総合的な視点から学習に取り組むことで、断片的な知識の集積ではなく、総合的な理解力や判断力を養成することを狙いとしている。本学院を取り巻く自然環境や歴史的遺産を生きた教材としてカリキュラムに活用するという考え方がその基となっている。

本学院は本庄市の浅見山丘陵に位置し、面積は 70 数 ha、長辺は 1.5 km に及ぶ。丘陵の一部の字名は「大久保山」であり、通称的に丘陵地帯全体を大久保山と呼んでいる。ここからは埴輪や土器などが大量に出土しており、丘陵周辺の平地には条里制の遺構跡も発見されるなど、山全体が歴史的遺産と位置づけられる。また、オオタカをはじめとする多くの野生生物が棲息し、多様な樹木や植物が繁茂している。さらに 本庄キャンパスのわきには利根川の支流である小山川、農業用水路である男堀川が流れ、科学関連プログラムの水質・生物調査の対象になり、地域との交流の舞台にもなっている。

本学院は「将来構想」（2012 年 11 月公開）の中で「大久保山学」を教育の特色の一つとして位置づけ、具体的にどのような教育プログラムが展開できるかについて検討を開始した。そして 2013 年の「Waseda Vision 150」の中で、「地域の特色を活かした『森に想い土に親しむ』教育を一層発展させた『大久保山学』をテーマに、科目横断型の教育・研究を通じて、社会の各分野で活躍できるリーダーを育成する」と基本理念を定め、その実現を図るための教育プログラムを「大久保山学」とした。

授業は第 3 学年（旧課程・1 単位）は水曜 4 時限目、第 2 学年（新課程・2 単位）は木曜 1・2 時限目にそれぞれ 8 講座を同時開講し、前期と後期で異なった講座を履修するセメスター制とした。生徒は 8 通りの組み合わせパターンの中から 1 つを選択することとしている。下表は 2023 年度の第 2 学年大久保山学の一覧である。

| コース | 前期 | 後期 |
|---|---|---|
| 1 | 英語圏文学で学ぶ「近代」と環境<br>−自然と都市を中心に− | 大久保山での数理探究 |
| 2 | 本庄高等学院の歴史と未来 | 大久保山の環境と生物多様性 |
| 3 | 身の回りの風景や土地利用の成り立ちについて考えよう | 学院生はどんなことを考えているんだろう？<br>〜テキスト分析と多変量解析の基本〜 |
| 4 | 理論と実践で学ぶ音楽史 | 大久保山から環境・エネルギー政策を考える |
| 5 | 大久保山から環境・エネルギー政策を考える | 本庄高等学院の歴史と未来 |

| | | |
|---|---|---|
| 6 | 大久保山での数理探究 | 身の回りの風景や土地利用の成り立ちについて考えよう |
| 7 | 大久保山の環境と生物多様性 | 理論と実践で学ぶ音楽史 |
| 8 | 学院生はどんなことを考えているんだろう？<br>～テキスト分析と多変量解析の基本～ | 英語圏文学で学ぶ「近代」と環境<br>-自然と都市を中心に- |

（カ）理数探求基礎

第２学年に全員必修科目として理数探究基礎を１単位設置している。この科目では、将来、生徒たちが社会で生きていく力をつけていくことを目的としている。その力のひとつとして STEAM を設定し、その学びを具現化するため、授業では実験や観察を通して、以下のプロセスを念頭に置いた探究活動を行っている。

① 意思決定

探究の過程で必要な意思決定力をつけるための OODA プロセス。

ア．Observe（観察）

イ．Orient（方向付け）

ウ．Decide（判断）

エ．Action（行動）

② 品質改善

実験装置や成果物の質を高めるための PDCA プロセス。

ア．Plan（企画立案）

イ．Do（実施）

ウ．Check（評価）

エ．Action（改善）

（キ）探究活動（卒業論文）

３年間の学習のまとめとして卒業論文を執筆させている。「自ら学び、自ら問う」という本学院の教育方針の具現化のひとつである。２年次の９月から 10 月中旬までの約２か月をかけテーマを決めるが、専任教諭と一部の非常勤講師からなる担当者と綿密な話し合いをした後に、卒論のテーマが決まる。その後、12 月から３年次の 12 月まで約１年間で、論文を完成させる。テーマに関しては進学希望学部との関連は問わず、自由に選ばせている。

自分の決めたテーマにじっくりと向き合い、資料を集め考察し、自分の意見をまとめ、それを論理的な文章に表す。この作業を通じて、さまざまな課題に問題意識を持つこととその解決方法、学術的な調査の方法、客観的な説得力を持つ文章の書き方、著作権や知的財産権への配慮等を学びながら自分自身の考え方をしっかりと持つことができ、学部進学への自覚を促すことになる。

論文執筆期間の、４月と９月に 4000 字程度（英文は A3 用紙５枚程度）の中間報告を義務付け、その都度担当者と協議をすることになっている。

- 第１次中間報告　　４月
  テーマ登録からすでに５ケ月が経過している。この間の進捗状況を報告する。
- 第２次中間報告　　９月
  夏休みを経過し、まとめの作業に入る前に、論文構成の確認のために目次を作る。

なお、論文の枚数などは以下の通りである。

① 用紙：A4、1 ページに 35 行、1 行は全角で 40 字（1 ページあたり 1,400 字相当）。Microsoft Word（doc、docx）で作成。
② 分量 15 枚以上。
③ 規程枚数には目次、本文、図表、注、参考文献リスト等を含める。但しアブストラクトは含めない。
④ 印刷：A4（縦書き、横書きともに同じ）用紙の片面に印刷する。
⑤ 学院から配布される所定のファイルにとじること。
⑥ 表紙には、配付の所定の表紙を使用すること。

⑦ やむを得ずタイトルの変更をしなければならない者は、事前に担当教員の許可を得ておくこと。
⑧ 英文の場合は、A4 用紙にダブルスペース、半角で作成し、片面印刷で 25 枚以上とすること。枚数に含めるべき内容は和文の論文に準じる。Microsoft Word（doc、docx）で作成する。

【卒論報告会】
2 月 14 日（水）13:50～15:40、稲稜ホールにて卒業論文報告会を開催した。２年生生徒に向け、早稲田大学本庄高等学院３年生３名と慶應義塾湘南藤沢中・高等部６年生１名が、卒業論文の内容と執筆過程紹介を報告した。
本年の報告のタイトルは以下の通りである。
・「ディズニー/ピクサー作品における非人間的存在表象の推移」
・「なぜラマダーンの断食は廃れないのか」
・「ニオイを発生させる物質とそれに対応する消臭剤」
・「映像作品と人種問題　――「南部の唄」から探る――」
慶應義塾湘南藤沢中・高等部からは教員２名・生徒３名が、早稲田摂陵高校からも教員５名が来校し、卒業論文を通じて活発な学術交流を行うことができ、有意義な教育機会となった。２年生にとっては執筆を進める上での大きな指針となり、学習上の効果が達成されたことと思う。

2.2 課外講義
2.2.1 キャリア教育
従来の進路指導では、学部説明会を中心に早稲田大学の各学部で学べる内容を理解し、生徒が進学先を選択するというスタンスをとっていた。
しかし、留学やセカンドスクール、大学卒業後のキャリアプランなどを視野に入れた進路指導を考えた時、実際に仕事についている社会人や現役の学生の話を聞き、大学生活のデザインをイメージした上で長い社会人生活を見通し、何を学ぶかを考える機会を与えることも必要となってくる。そのためには生徒に、自分の将来をおぼろげにでもイメージさせ、そこへ至る過程としての大学生活について、高校生のうちからしっかりと考えさせる必要がある。
本校ではこのような進路指導観から、生徒が自分の将来を考えるきっかけとしてのキャリア教育を充実させるべく、社会人や大学教員、そして現役大学生・大学院生などから直接話を聞く機会を設けている。これを具現化する目的で、9 月に集中的に行うキャリデザインウィークと、月一度のペースで行うキャリデザイン講座を実施している。

（ア）キャリデザインウィーク
９月にキャリアデザインウィークを設け、現在の学院生活、大学、その先の将来を有機的に結び付けたキャリアパス意識を啓発するような講座を集中的に行った。以下の表にその概要を示す。
〔進学の部〕
9/13（水）
・政治経済学部／社会問題解決のための力：経済学で解く環境問題／80 名（参加者数、以下同）
・教育学部／地球・宇宙を「化学」する／28 名
・先進理工学部／最先端の素粒子実験／37 名
・スポーツ科学部／“ひとのつながりから見えるもの”心・怪我・遊び／9 名
・政治経済学部／メディアを量的に分析しよう～内容分析という手法のススメ／91 名
・人間科学部／栄養バランスでアンチエイジング／13 名
・国際教養学部／リベラルアーツ教育と天文学入門／31 名
9/20（水）
・文化構想学部／「世界文学」の定義とその読書のためのヒント／29 名
・基幹理工学部／未来の宇宙往還機と推進システム／32 名

・社会科学部／18 世紀の黒人奴隷貿易を人類史の中で考えてみる／34 名
・法学部／ふるさと納税をめぐる国と地方との関係／30 名
・文学部／ロシア・ウクライナ戦争と「文化」のナショナリティ／13 名
・商学部／データ分析　相関関係と因果関係／31 名
・創造理工学部／建築をとりまく仕事とデザイン - Engineering WOOD の事例-／58 名
〔就職の部〕
9/9（土）
・外資系コンサルティングファーム／キャリアデザイン実例／38 名
・市社会福祉事業団／卒論は偉大だった！ ～自分の仕事への影響～／4 名
9/16（土）
・東京都職員／都庁の幅広いおしごと／20 名
・法律事務所／学部進学と法曹への進路について／18 名
・JICA／本当の“豊かさ”とは？私が国際協力の道を選んだワケ／24 名

【進学の部】
早稲田大学の各学部から講師が来校し、各学問分野で最先端をいく高度な内容の講義が、高校生の理解度に合わせて行われた。本庄高等学院の卒業生たちの学部や大学院での活躍を紹介してくれた講師もいて、会場は大いに盛り上がった。生徒たちは、講演の後も活発に質疑を行うなど、講師とのやり取りを行うことができた。附属校として大学を意識し、また、ミスマッチのない進学のために大学について理解をする、良い機会となった。

【就職の部】
既に社会人となった５名の OB・OG が講演を行った。多彩な就職先の卒業生が集い、学院生活や学部選択、大学生活や就職活動の話を熱心に披露してくれた。コロナ禍中の大学生活・就職活動の話は大変興味深く、参加した生徒たちは熱心に講師の話に耳を傾けていた。

（イ）キャリデザイン講座
9 月に集中的に行うキャリデザインウィークと並行して、およそひと月に一度、年間 6 回程度のペースで本校 OB/OG を招き、キャリアデザイン講座を開講している。以下は 2023 年度実施内容である。

| | 日程 | 職業 | タイトル | 参加人数 |
|---|---|---|---|---|
| 第 1 回<br>(28 名) | 4 月 22 日<br>(土) | 会社経営 | 起業について | 28 名 |
| 第 2 回<br>(60 名) | 6 月 7 日<br>(水) | 総合エネルギー<br>開発 | 資源・環境・エネルギーについて | 60 名 |
| 第 3 回<br>(25 名) | 7 月 5 日<br>(水) | 放射線技師 | 放射線技師による解剖学の講義・実習 | 25 名 |
| 第 4 回<br>(22 名) | 10 月 7 日<br>(土) | 公認会計士 | 公認会計士について | 22 名 |
| 第 5 回<br>(20 名) | 11 月 11 日<br>(土) | 国家公務員 | 外務省について | 20 名 |
| 第 6 回<br>(17 名) | 12 月 9 日<br>(土) | 法曹 | 弁護士について | 17 名 |

2.3　行事
2.3.1　稲稜祭
前年度に対面形式による稲稜祭が復活し、新型コロナ感染症が 5 類移行することを受け、今年度は食品販売を含めた開催形態を目指した。前年度に成功した数々の取り組み（運営の効率化や

予算の削減）を継続し、来場者ならびに学院生が楽しめる稲稜祭になるよう、実行委員と生徒担当教務で準備を進めた。

食品販売については、感染症が完全収束していないリスクを鑑み、今年度は「既製品のみの販売」に留まった。それでも1年生1クラス、2年生1クラスが食品販売を希望し、両クラスとも無事に完売することができた。結果論ではあるが、9月以降にインフルエンザの流行が全国的に拡大し、本庄高等学院内でも10月以降に罹患者が急増したことを踏まえると、企画立ち上げ時にリスク回避を選択したことは賢明な判断だった。

また、感染拡大防止として取り入れた準備作業時における生徒のマスク着用、各クラス企画における常時換気や1時間に1回の校内一斉換気を呼びかけたことも一定の効果があったと言える。

両日通じて大きなトラブルも無く終了し、天候にも恵まれ、初日（土曜日）1,515名、2日目（日曜日）2,467名、延べ3,982名の来場があった。実行委員の振り返りアンケートからも、準備作業を含めて充実した日々を過ごせたことがうかがえる。

一方で、次年度以降への課題も山積している。コロナパンデミックにより稲稜祭にも空白の数年が生まれたことで、クラス企画における稲稜祭直前の準備作業の在り方に多くの問題が生じた。特に、塗装のルールの厳格化は喫緊の課題である。また、クラス企画内容についても偏りが見られることから、次年度以降は、各学年における企画ジャンルや数を制限する必要がある。食品販売の在り方も、完全に従前と同様にするのではなく、本庄高等学院の現状に則した内容に更新していく必要があろう。

2.3.2　体育祭

ここ数年コロナ禍で制限下での体育祭であったが、本年度は久しぶりに「制限なしフル開催」となった。これまでの体育祭から一新し、種目の選定から運営まで生徒が主体となって進めた。個人種目の他、クラス全員リレー・綱引き・大縄跳び・ムカデリレーなどで競い体育祭を通じてクラスが思いをひとつにした。熱中症が心配な時期であったが、幸いにも程よい気温のもとに開催することができ大きな影響がなかったことも良かった。「紺碧の空」合唱で見えた生徒達の熱量には、生徒達の心情が反映されていたと思うと、他活動では得難い時間を体験できたと言える。

2.3.3　球技大会

第1・2学年で実施した。男子はフトボールとサッカー、女子はバレーボールとドッチビーをおこなった。野球場、サッカー場、体育館をフル活用して、体育の授業だけでは得られない、クラスが団結する有意義な時間であった。天候にも恵まれ、秋晴れの青空のもと生徒の笑顔が輝いていた。

2.3.4　人権教育

本年度の人権教育講演は2月22日（木）LHRの時間を活用し、第2学年を対象に実施した。西井開氏（立命館大学人間科学研究所男性問題相談室（DV加害者更生カウンセリング）所属）が「性差別の問題は男性にどう関係するのか」をテーマとする講演を行った。

性差別の問題について、近年の動向や具体的事例が取り上げられ、様々な知見を得られる良い機会となり、生徒たちも聞き入っていた。

2.3.5　芸術鑑賞教室

11月1日（水）に、本庄市民文化会館で実施した。3年生が校内で試験を実施するため、1,2年生のみ参加となった。2023年度は「PAN NOTE MAGIC」によるスティールパンの演奏鑑賞会を企画し、途中休憩を挟みながら約90分間の公演を鑑賞した。

当日は校内でのインフルエンザ・新型コロナ感染者の増加および学級閉鎖が重なったため、鑑賞時はマスク着用が義務付けられたが、工夫の凝らされたステージに生徒たちは飽きることなく最後まで楽しんでいた。特に、楽器体験のコーナーやスティールパンの歴史をまとめたコーナーでは会場内は大いに盛り上がり、生徒たちが楽しい時間を過ごす貴重な時間となった。

2.3.6　早慶野球戦観戦

5 月末に行われる六大学野球リーグ最終戦（早慶戦）の応援に第 1 学年行事として参加した。当日は気温が高くなったが、日陰で休む等の対応で大事には至らなかった。

試合は終盤に逆転ホームランが出て早稲田が勝利する展開になり、大いに盛り上がりを見せた。試合後には、球場全体で早慶のエール交換を行い、早稲田としての一体感を感じる有意義な行事となった。

2.3.7　秋の学年行事

第１学年

10 月 13 日(金)、長野県小諸市と軽井沢町への校外学習を実施した。８クラス観光バスで移動した。小諸市の松井農園ではりんご狩りをした。長野県特産で旬を迎えたリンゴの食べ放題に、生徒たちは夢中であった。軽井沢町では昼食時間を挟んで旧軽井沢エリアを自由行動とし、紅葉に色づき始めた街の散策を楽しんだ。好天に恵まれ、生徒同士の親睦を深める良い機会となり大変充実した一日となった。

第２学年

10 月 13 日(金)、早稲田大学所沢キャンパスへ訪問し、人間科学部とスポーツ科学部の説明を受けた。目的は、大学生の息づかいを感じ、自身の高校生活の意義を見つめ直すこと。何のために大学生になるのか深く考える機会を持つこと。学部の教育内容・特徴を十分理解し目標設定・進路選択へ繋げる機会とすることであった。生徒たちは大変貴重な経験を積むことができた。

2.3.8　健康教育

【第１学年】

6 月 8 日（木）「ストレスと上手につきあおう」樫木啓二氏（大学学生相談室）

【第２学年】

9 月 7 日（木）「デートＤＶとは～相手を尊重したつきあい方を学ぶために～ 」
西山さつき氏（NPO 法人レジリエンス代表）

【第３学年】

7 月 6 日（木）「依存症の実態と予防」瀧村剛氏（久里浜医療センター）

各学年に 1 回、専門の講師を招いて心身の健康に関する健康教育講演を実施している。1 年生は学院生活での相談スキルを上げること、2 年生は相手を尊重したつきあい方を学ぶこと、3 年生はアルコールや薬物依存、ネット依存の知識を深め予防に努めることを目標としている。生徒の反応は概ね良好で、講演後、講師の先生に個別の質問や相談に訪れる姿が見られた。

2.3.9　交通安全等講話

４月 12 日（水）に、第１学年オリエンテーションの一環として、「交通安全防犯講話」を実施した。

本庄警察署員による講話で、交通課の方からは主に自転車の安全走行や登下校中の防犯に関するお話を、生活安全課の方からは SNS での犯罪やトラブルに関する内容について、映像も交えた話をしていただいた。近年、自転車通学の生徒は減少しているが、自らが加害者にも被害者にもなり得ることを踏まえ、継続して交通安全への啓発を行なっている。生徒の受講態度も良く、交通安全への啓発を効果的に行なうことができた。

2.4 課外活動

2.4.1　生徒会活動

新型コロナ感染症が 5 類移行することを受け、4 月の対面式では、2019 年度以来となる全校生徒による校歌斉唱が行われた。新入生オリエンテーションにおける部活動紹介、文化部合同発表

会といったイベントは従前通りの開催が出来た。3 年生を送る会については、例年一部の公認団体しか参加が見られなかったことから開催を取りやめ、1 月の学期集会で 1,2 年生全体から 3 年生にエールを送る形式に変更された。

稲稜祭では生徒会執行部によるキャンパスツアーも再開し、多くの参加者を集めていた。恒例の生徒会誌は 1 月に発行し、全学院生に配付したほか、2024 年度新入生にも配付される予定である。

学外活動の一つである本庄市による市内高校合同文化祭「七高祭」にも執行部を中心とする学院生が運営メンバーとして参加した。

その他、昨年度は中止となってしまった赤十字血液センターの献血バス配車による献血が 11 月に無事に行われた。また、近年活動が低調になっていたコンタクトレンズケースの回収事業が再開され、11 月には相当量の寄付を行うことができた。生徒会執行部による今後の社会貢献活動への注力にも期待が持てる 1 年となった。

2.4.2　部活動

文化部門 22、体育部門 15 のクラブが活動した。

クラブの活動目的は心身の成長を目指すもの、より上位の大会での成果を目指すもの、稲稜祭での発表に力を注ぐもの、部員の親睦を図るものなど異なるが、各団体がそれぞれの目的に向かって活発に活動した。特に、コロナパンデミックが明けて様々な制限が解除されたことに伴い、長期休業における合宿が多くの団体で再開され、生徒たちの青春を彩っていることがうかがえる。

昨年度までは無観客や入場制限が課されていた大会についても多くが従前通りとなり、生徒たちは声援を一身に浴びながら競技やパフォーマンスに集中できるようになった。今年度は全国大会に陸上部、スキー部、囲碁将棋部、書道部が出場、関東大会にソフトテニス部が出場するなど多くの活躍がみられた。

2.4.3　プロジェクト活動

課外活動に対する学院生のニーズが多様化していることに応え、部活動にない活動に取り組む有志団体について、顧問の指導のもとで充実した活動ができるよう 2022 年に新たに設けた公認制度である。

2023 年度は、国際交流プロジェクト、地域連携プロジェクト、企業連携プロジェクト、附属連携プロジェクト、科学未来館連携プロジェクトの 5 団体が公認され、活動を行った。

（ア）国際交流プロジェクト

SGH・SSH 活動で培った国際学術交流活動の発展・継続を図る。参加生徒は随時募集し、各活動において生徒主体でコーディネートを行った。

- 韓国セロナム高校とのオンラインシンポジウム開催と、それに向けての準備活動。
- ソウル市教育庁と連携東アジア ESD 交流に参加し、国際共同研究。
- ポストコロナにおける国際交流活動のプラットフォーム形成。
- シンガポール・ナショナルジュニアカレッジ（NJC)との学術交流。
  期間：2023 年 2 月末から 2023 年 8 月末まで
  方法：2023 年 2 月末～2023 年 6 月末まではオンライン会議システム（zoom）により実施。合同ゼミ形式のセッションを定期的に開催し、特定のテーマ（文系）について探究。2023 年 7 月末から 2023 年 8 月にかけては、NJC 主催の高校生による国際会議（対面)。
- タイの MWIT、シンガポール NJC との科学教育を中心にした相互交流活動。共同研究の実施。

（イ）アントレプレナーシップ活動プロジェクト

早稲田大学アントレプレナーシップセンターとの連携で実施する、本学院のアントレプレナーシップ活動を推進した。具体的な活動は以下の通り。

- 本庄市・国分寺市等における WEYI 地域創生アイデア創出プログラム
- WASEDA Demo Day、GTIE 等への参加

・　スタンフォード d-school プログラム開催
・　その他、附属系属校間、他高校とのアントレプレナーシップ活動

（ウ）地域貢献・連携プロジェクト
本庄市および近隣地域への貢献活動・還元活動、地域企業との連携活動を行う。参加生徒は随時募集した。具体的には、以下の活動を主とした。
・　地域小学校への総合学習支援活動（本庄早稲田国際リサーチパークとの連携）
・　地域小学校への国際理解教育支援活動（本庄早稲田国際リサーチパークとの連携）
・　本庄市民総合大学・こども大学本庄への協力（本庄市との連携）
・　地域企業との連携活動
・　こども科学教室の開催（本校主催）
・　その他地域との連携活動

2.4.4　科学教育課外プログラム
（ア）特別講義「これがサイエンスだ！」
本学院教員による特別講義「これがサイエンスだ！」を、以下の内容で実施した。この講座は2013 年度から開始され、今年度は実施から 10 年というひとつの節目を迎える。昨年度に引き続き、今年度も全て対面で実施した。毎年数回、生徒たちに対して科学に興味を持つきっかけになることを目的に実施している。

第１回「八元数の構成とその代数的住処」（数学科：太田洋平教諭）
第２回「数学はいきものだ！：数学を分析するということ」（数学科：成瀬政光教諭）
第３回「宇宙線で物を透視する：ミュオグラフィ技術の力」（理科：大塚未来教諭）
第４回「世界に一つだけの三角形のペアについて」　（数学科：根本裕介教諭）
第５回「大学の力学入門：惑星の軌道の導出」（数学科：峰真如教諭）
第６回「量子コンピュータ入門」（数学科：峰真如教諭、学院生：鈴木翔太）
第７回「超実数は超すごい⁉：超準解析への誘い」（数学科：羽田一郎教諭）
第８回「確率論を用いた金融商品のモデリング ： 二項モデルによるオプションの価格付け」（数学科：新井康太非常勤講師）
第９回「液晶って何？ ： 身の回りの知らない物理」（数学科：冨山雄司非常勤講師）
第 10 回「森林が地球環境問題を解決する？～森林生態学のすすめ～」（理科：樽見知樹非常勤講師）
第 11 回「貝も学習する！？～行動からひも解く学習の不思議～」（理科：並木健悟非常勤講師）
第 12 回「ネズミの脳を観察しよう～大脳皮質発生について～」（理科：島本碧海非常勤講師）

また今年度は、2020 年より COVID-19 の影響により開催することができなかった、長期休業中の合宿を実施することができた。今年度は夏合宿（2023 年 8 月）と春合宿（2024 年 3 月）の 2 回実施した。この合宿は「授業では扱わない専門性のある内容を探究し、進学や将来について新たな視点をもつ」ことを目的とし、宿泊しながら一つのテーマを探究する。最終日には各パートから成果報告を行う。
夏合宿は 2023 年 8 月 6 日（金）から 8 日（日）の 2 泊 3 日で行われた。参加者 13 名は 3 つの数学パート、1 つの物理パートに分かれ探究活動を行った。各パートの内容は次のとおりである：
・　物理パート：宇宙線 $\mu$ 粒子の数を計測しデータから学校の校舎の内部の構造考察する計測実験
・　数学パート 1：モノイダル圏上で代数の概念が定義できること、八元数はあるモノイダル圏の中での代数とみなすことができることの追究
・　数学パート 2：平川-松村の定理の拡張
・　数学パート 3：数学教育学に基づいた「接線」の“生態”の調査

探究活動の合間には、数学科峰真如教諭から基調講演「研究は「人」がするものである」、数学科太田洋平教諭から特別講義「リボン圏を用いた結び目不変量について」をそれぞれ行った。

春合宿は 2024 年 3 月 28 日（木）から 29 日（金）の 1 泊 2 日で行われた。参加者 11 名は数学パート・物理パート・生物パートに分かれ探究活動を行った。各パートの内容は次のとおりである：

- 物理パート：宇宙線の観測により、セミナーハウスの構造を計測する実験
- 生物パート：土壌微生物の活性に関わる実験
- 数学パート：ブール代数とスイッチ回路の関係の追究

探究活動の合間には、4 月に学部進学する 3 年生から卒論報告「日本の高等学校の数学教科書に新たに導入すべき現実世界の問題とは」、数学科成瀬政光教諭から特別講義「証明は何のために？」、数学科根本裕介教諭から特別講義「無限の話」をそれぞれ行った。

合宿を通じて「ひとつの事に常に取り組むという体験が初めてだったので、大変だったけれど学びのある体験になった」や「大学での活動などを知ることが出来て非常に有意義だったと感じた」という参加者の感想を得た。このため、合宿の目的はおよそ達成できたといえる。

なお、課外講義「これがサイエンスだ！」の 10 年の実施内容およびそれに対する評価・考察は、本学院の研究紀要を参照されたい：成瀬政光， 太田洋平， 大塚未来， 根本裕介， 峰真如 (2024)． 課外講義「これがサイエンスだ！」10 年の歩みと展望． 早稲田大学本庄高等学院研究紀要『教育と研究』，(42)，pp． 1-21.

（イ）河川研究班の活動[1]

河川研究班の活動は、2009 年に開始された。当時本庄市・早稲田大学榊原研究室が進めていた元小山川の河川環境改善活動に加わる形で、当時の SSH プログラムの 1 つとして実施された。2012 年には同様に河川環境保護活動を行っていた本庄市立藤田小学校と連携し、年 2 回の合同河川調査と年 8 回の５・６年生の総合学習の授業を本校生徒が受け持つこととなった。河川研究班は部活動ではない。この活動に興味を持つ生徒を毎年新年度に募集し、10〜15 名の生徒で活動している。多くの生徒は３年間継続する。

今年度は、合同河川調査を 5 月 11 月の２回、授業は 5 回実施した。

3 月 16 日川のシンポジウム

なお、河川研究班の活動のポイントの１つは、河川環境保護に関わる市民シンポジウムを中心とした広報・啓蒙活動である。3 月 16 日（土）13 時〜14 時半に早稲田国際リサーチパークで「川のシンポジウム」を実施した。3 年前からオンライン参加している三重大附属小は、今年対面で 4 名の児童が参加した。また早稲田大学留学生の Chen Tong さんから黄河について報告を得ることができた。

また、コロナ禍が始まった 2020 年に作成開始した図鑑「ほんじょうの川のいきもの」への取

[1] 42p にも関連記事を記載。

り組みと小型河川エビの研究が 2023 年度川のワークショップ関東大会で特別賞を受賞した。

2.5 国内外交流・研修

2.5.1　修学旅行

修学旅行は新型コロナウイルスの影響により、2020 年度と 2021 年度は中止となっていたが、2022 年度は国内修学旅行として復活し、今年度は 10 月 10 日（火）から 13 日（金）の 3 泊 4 日で、行き先を関西と北陸の 2 コースとした。生徒にはクラス関係なく 4〜8 名の班を作らせ、班ごとに参加コースの希望調査を行ない、関西コース 241 名、北陸コース 89 名となった。後日、公認団体活動等で不参加者 17 名（不参加者数は合計 18 名）が出たことにより、関西コース 225 名（男 101 名・女 124 名）、北陸コース 88 名（男 47 名・女 41 名）での実施となった。

関西コースは、南京町自主研修、神戸クルーズ、六甲山夜景見学、選択プラン（和菓子作り体験、京友禅体験）、嵐山自主研修、清水寺、奈良・京都・大阪自主研修、興福寺、東大寺、奈良国立博物館など、北陸コースは立山黒部アルペンルート、白川郷、東尋坊、永平寺、金沢市内自主研修、福井恐竜博物館など、といった見学・体験を行なった。いずれのコースも班別自由行動日が設定されており、生徒たちは班別に事前調査した行程で自主研修を行なった。

今年度の第 3 学年（40 期生）の多くは、中学時に修学旅行を経験できずにいたため、今回の修学旅行が待望の行事であったことは事後アンケートの結果からも窺えた。2 コースとも大きな事故や体調不良者もなく、生徒の満足度の高い行事となったと言えるだろう。

2.5.2　海外からの訪問交流

2023 年度は長年の交流がある海外高校からの訪問交流が復活した年となった。在校生の関心は高く、特に 5 月の台湾・台中一中訪日修学旅行団を迎えた時は、アテンドするバディを募集したところ 50 余名が名乗り出て、１対１交流が可能になった。英語だけなく中国語を使えるということで立候補した生徒も複数おり、複数言語の交流会を催すことができた。

交流校からの訪問は以下の通りである。(URL は本学院ホームページでの紹介記事)

台中市立台中第一中学

- 5 月 25 日（木）
- 目的：訪日修学旅行での 1 日交流　生徒 50 名来校
- 企画：歓迎交流会、授業体験、文化交流
- https://www.waseda.jp/school/honjo/news/4495

シンガポール National Junior College (NJC)[2]

- 自然科学班：10 月 28 日（土）〜11 月 2 日（木）
- 人文科学班： 11 月 10 日（金）〜11 月 15 日（水）
- 目的：研究交流
- 企画：授業体験、共同研究会、フィールドワーク、日本文化体験

[2] 20p22p にも関連記事を記載。

・　https://www.waseda.jp/school/honjo/news/4568

タイ　Mahidol Wittayanusorn School (MWIT)[3]
・　10 月 15 日（日）～10 月 21 日（土）
・　目的：研究交流
・　企画：授業体験、共同研究会、フィールドワーク、日本文化体験
・　https://www.waseda.jp/school/honjo/news/4495

2.5.3　留学
（ア）長期留学生の受け入れ
今年度は３人分、４名の長期留学生を受け入れた。2022 年 9 月に留学を開始した日台交流協会派遣の田黄さん（～７月）と 2024 年 7 月まで滞在する陳伸睿さん（9 月～）、文部科学省と AFS の「架け橋プラス高校生」陳佳容さんと Gayandi　Wickramashinghe さん（12 月～3 月）である。留学生の学齢と本学院の教育プログラムを考え、田さんは 3 年生、陳伸睿さんと Gayandi さんは２年生、陳佳容さんは１年生が受け入れクラスとなった。留学生への支援は受け入れクラスの担任と留学・交流委員、生徒担当教務主任と寮主任が分担して行った。授業では留学生それぞれの言語レベルと興味関心に応じて所属クラスの通常授業および他学年・他クラスの授業を組み合わせた個別の時間割を作成して支援した。
４人は部活動や学校行事に参加するほか、地域の国際理解を深める企画や日本文化を知るためのフィールドワークに参加した。また今年度は受け入れクラスに加え、受け入れ学年全体で長期・短期の留学生から学ぼうという学年集会も開かれた。出身国の厳しい選抜を勝ち抜いて来日した留学生たちだけに、いずれも見事なミニ講義を行い、同学年の生徒たちに大いに刺激を与えた。
授業や部活動で関わる教職員も増えたことで、支援や指導の方法などで教職員間で意見交換

[3] 21p22p にも関連記事を記載。

をする機会も増え、留学生の個性を大事にしながら正規学生と一緒に育成していく気風が醸成されつつある。担任の負担を増やすことには留意が必要だが、生徒たちは受け入れクラスになることを喜ぶ気風が見られる。また22年度3月にスタートしたKia Oraプログラムの経験者が、ニュージーランド滞在中にホストファミリーから受けた恩を返したいとの意欲を持ち、留学生の世話役に名乗り出る動きもみせている。在校生にとって複数の長期留学生と接するインパクトは大きく、クラスや部活動で仲間として接する経験をしたり、留学生が活動の幅を広げていく様子を目の当たりにして敬意と憧れの気持ちをいだくなど、好影響がみられている。

留学生個々の状況は以下の通りである。

① 田　黄（TIEN, Huang)さん（台湾・宜蘭市出身、梓寮生）
- 支援団体：日本台湾交流友好協会
- 所属学年：３年生（担任の担当教科は数学）
- 本学院滞在期間：2022年９月１日～2023年７月15日
- 学習支援：受け入れクラスの通常授業、３年生選択科目
- 言語支援：特になし（日本語・英語とも学校生活が可能なレベル）
- 部活動等：書道部、硬式テニス部に所属
- 発表活動、コミュニティーへの貢献等：全日本学生美術展特選受賞、地元小学校での国際理解・英語学習支援授業等参加、Waseda English Kids、書道部メンバーとして、本庄早稲田駅での上越新幹線開通40周年記念行事「ほわフェスタ」に参加。

② 陳　伸睿（CHEN, Shen-Jui)さん（台湾・嘉義市出身、早苗寮生）
- 支援団体：日本台湾交流友好協会
- 所属学年：２年生（担任の担当教科は英語）
- 本学院滞在期間：2023年９月１日～2023年７月15日
- 学習支援：受け入れクラスの通常授業（一部は自習時間に振替）
- 言語支援：授業中はスポット的な個別対応以外は特になし（日本語はＮ２レベル）
  早稲田大学日本語教育研究センターによる「わせサポ」の相談セッションの支援
- 部活動等：書道部、男子バスケットボール部、軽音楽部に所属
- 発表活動、コミュニティーへの貢献等:地元小学校での国際理解･英語学習支援授業等参加、Waseda English Kids、書道部・軽音楽部メンバーとして学園祭発表に参加。

③ Gayandi Wickramashinghe さん（スリランカ・コロンボ市出身、梓寮生）
- 支援団体：ILS
- 所属学年：２年生（担任の担当教科は家庭科）
- 本学院滞在期間：11月26日～3月16日
- 学習支援：受け入れクラスの通常授業
- 言語支援：　AFS群馬支部メンバーによる定期的な日本語補習、担任による配布物のDeepL翻訳、機械翻訳ソフトUDトークを活用
- 部活動等：
- 発表活動、コミュニティーへの貢献等：Waseda English Kids, 地元小学校での国際理解授業参加

② 陳　佳容（Chen Jiarong)さん（中国・上海市出身、６月27日～３月10日在学、梓寮生）
- 支援団体：AFS群馬支部（アジア高校生架け橋プロジェクト　第５期生）
- 所属学年：１年生（担任の担当教科は英語）
- 本学院滞在期間：11月26日～3月16日
- 学習支援：受け入れクラスの通常授業、同学年他クラスの組み合わせ
- 言語支援：不要
- 部活動等：・発表活動、コミュニティーへの貢献等：

・　地元小学校での国際理解授業参加、Waseda English Kids、学年集会でのミニ講義

（イ）「荻野奨学金」を活用した受入留学生支援（第三年次）

本学院は、早稲田大学で学ぶ留学生の学習支援のための指定寄付「荻野奨学金」を活用する箇所の１つとして選ばれ、21 年度から 25 年度までの５ヶ年間に受け入れる留学生の学習、および留学生と在校生との共同学習にこの奨学金が使えるようになった。

活用初年度に、留学・交流委員会で活用ガイドラインを作成し、使用目的が

A.　留学生が日本および学校生活のルールや慣習を理解し、大きな支障なく心身ともに健康に滞在できるための支援

B.　留学生が日本語を学び、高校生の生活をより深く理解するための支援（公立学校や早稲田大学訪問、部活動大会の参加支援などを含む）

C.　留学生が日本の風土・文化・芸術・歴史や現代社会の動き等を、学院生と共に学ぶための支援

に原則として該当するものに支出するとした。23 年度の活用事例と成果は以下の通りである。活用事例の対象留学生は個人差があるが、使える言語の違いや個々の興味関心、在学時期の違いなどに因るものである。

①　UD トーク（音声言語の翻訳字幕自動作成アプリ）教育機関向けプラン契約料（目的 A、B）

留学生が滞在期間中に可能な限り通常授業に参加できるようにするため、言語支援を目的として導入した。23 年度は Gayandi Wickramashinghe さんが活用した。

②「DeepL」（機械翻訳プログラム）使用料（目的 A）

主に LHR での連絡・周知事項を英語で機械翻訳し、正規生徒との情報ギャップに起因する学院生活でのトラブルが起きないように配慮した。23 年度は Gayandi Wickramashinghe さんの担任が活用し支援を行った。

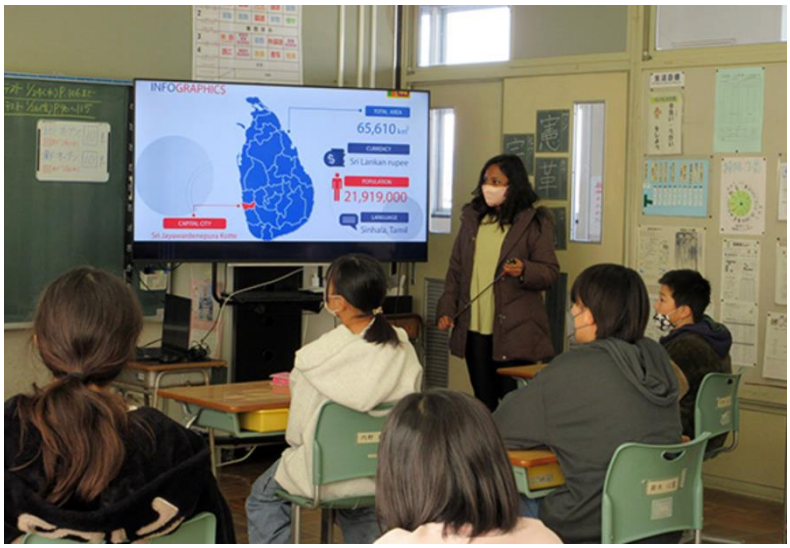
③　早稲田大学および日本文化体験フィールドワーク実施（目的 C）

世話役教員が留学生の日本文化・社会への関心事を聞き取り、山梨・京都・軽井沢・栃木等へのフィールドワークを実施した。 留学生の活動の紹介は、世話役教員による学院ホームページへの以下の寄稿で発信した。

・　Waseda Honjo English Kids 2023　12 月 3 日（日）
https://www.waseda.jp/school/honjo/news/4633

・　小学校プログラム国際理解@共和小　12 月 13 日（水）
https://www.waseda.jp/school/honjo/news/4678

・　小学校プログラム国際理解＠藤田小　１月 24 日（水）
https://www.waseda.jp/school/honjo/news/4860




（ウ）AFS 他校長期留学生の短期滞在

AFS 群馬支部の支援依頼を受け、群馬県内の高校に長期留学中の生徒２名を「異地域体験プログラム」協力校として受け入れた。12 月 5 日（火）～12 月 14 日（木）に 1 学年２クラスの通常授業に参加してもらった。受け入れ生徒は以下の通りである。

・　Berzina Madara さん　ラトビア出身、共愛学園に留学中
・　Dominguez Sanchez Simon さん　アルゼンチン出身、東京農大二高に留学中

期末試験直後の受入となるので、稲稜祭 1 日目の 10 月 29 日（土）に受け入れ予定クラスの展示に来てもらい、事前の顔合わせをした。受け入れ中の 12 月 7 日（木）には 1 学年が学年集会を開き、それぞれの出身地について２名にミニ講義をしてもらった。短い滞在だが互いに学ぶところの大きい機会となった。

ヤマキ醸造にて　留学生３名、異地域体験留学生２名とともに

（エ）　短期海外派遣[4]

2023 年度はコロナ禍前に実施していた海外派遣プログラムを再開できたほか、２回のニュージーランド短期留学プログラムを実施できた。短期留学プログラムへの在校生および保護者の関心は高く、応募者は定員の２倍以上となった。

①　早稲田大学高大連携推進課　および国際部の支援によるプログラム

- スイス公文学園 Summer in Leysin プログラムに派遣
  - 派遣先：スイス　　人数：１名
  - 期間：7 月 8 日（土）～8 月 19 日（日）

- Kia Ora Program 2023 Summar
  - 渡航先：ニュージーランド　　人数　計 22 名（高等学院からも 11 名）
  - 期間：7 月 21 日（金）～8 月 11 日（金）
  - 派遣先　Palmerston North ８名、Hawke's Bay 14 名

- Kia Ora Program 2024 Spring
  - 渡航先：ニュージーランド　　人数　15 名（高等学院からも 15 名）
  - 期間　3 月 16 日（土）～3 月 30 日（土）
  - 派遣先　Palmerston North ８名、Hawke's Bay 14 名

② 交流協定校との研究・文化交流プログラム　（学内の協働研究・交流プロジェクト）

Singapore National Junior College

・　SISTEMIC(Singapore International STEM Innovation Challenge)　参加
　人数：3 名　　期間：5 月 24 日～5 月 29 日
　https://www.waseda.jp/school/honjo/news/3564
　https://www.waseda.jp/school/honjo/news/3612

[4] 関連記事を 2.5.4 にも記載。

・　人文科学分野　研究交流
　　人数：５名　　期間：7 月 30 日～8 月 4 日
・　自然科学分野　研究交流
　　人数：６名　　期間：8 月 1 日～8 月 8 日
　　https://www.waseda.jp/school/honjo/news/3999

Thailand Mahidol Wittayanusorn School (MWIT)
・　自然科学分野研究および文化交流
　　人数：８名　　期間：2024 年 1 月 28 日（日）～　2 月 4 日（日）
　　https://www.waseda.jp/school/honjo/news/4973

（オ）留学・交流委員会（教職員）の業務
22 年度は長期留学生を３名受け入れることになり、委員会では受け入れクラス担任と協働支援および「荻野奨学金」の活用方法および業務分担について協議をした。年度後半は 2023 年からの生徒海外派遣再開への動きを踏まえ、具体的な実施方法や保護者・生徒の不安を軽減するための必要事項の洗い出しを行った。また 2023 年度に学術交流プロジェクトとして実施準備中の企画について、経費の出処のあり方について意見交換を行った。

（カ）在校生の長期留学
在校生の留学状況としては、第１種留学（休学を伴う留学）で２名、第２種留学（休学を伴わない留学）で１名が留学中である。留学先と留学期間は以下の通りである。
・　第１種留学　アメリカ合衆国（2023 年９月～2024 年７月）２年生１名（女子）
・　第１種留学　カナダ（2023 年９月～2024 年７月）２年生１名（女子）
・　第２種留学　アメリカ合衆国（2023 年９月～2024 年７月）２年生１名（女子）

2.5.4　海外交流プログラム
（ア）ミニシンポジウム「国際交流へのいざない」開催
これはコロナ禍が始まった 2020 年、授業も全てオンラインだった時期に、本校が国際交流に熱心な学校と思って入学した生徒が多いこと、生徒たちの国際交流への興味をつぶしたくないことから、開催したイベントである。その後、新入生が充実した学校生活を送るためには予めイメージしておいてもらうことが効果的であること、保護者の方の理解につながることから、継続して開催している。
今年度は新入生を主対象に３月 27 日（水）に実施した。どうせならば学校の様子を理解してもらうため、保護者の参加も認めたいと考え、19 時～20 時の時間帯で Zoom により実施した。在校生・新入生・保護者を含め 180 人が参加した。

（イ） ICRF(International Collaborative Research Fair)2023[5]
このイベントは、立命館高校が主催する共同研究を必須としたオンラインの高校生科学シンポジウムであり、海外８カ国から 19 校、国内 22 校が参加し、海外校と国内校がペアリングの上で共同研究テーマについて８ヶ月取り組んだ成果を、2024 年１月 27 日（土）に発表した。
本校は 4 名の生徒が参加し、台湾高雄市立高雄高級中学の生徒とともに「グッピーの求愛行動」について成果を発表した。

（ウ）JSSF(Japan Super Science Fair)2023
このイベントは、立命館高校が主催する世界最大規模の高校生国際科学シンポジウムであり、今年度は世界 20 カ国から 31 校、国内 12 校の生徒教員が参加し、11 月３日～7 日の日程で立命館高校・立命館大学琵琶湖草津キャンパスを舞台に開催された。
本校からは２名の生徒が、運営スタッフ・発表者として参加した。

（エ）Singapore National Junior College(NJC)との交流
NJC とは 2007 年姉妹校の MOU を締結して以来、10 人程度の生徒の相互訪問を行っている。共同研究を軸としていることが特徴である。
今年度は７月 28 日～８月５日の間、人文科学グループの５名、８月１日～８日の間、自然科学グループの６名が NJC を訪問し、交流した。また、10 月 27 日～11 月２日の間、自然科学グループの６名と教員２名（さくらサイエンスプランで実施）、11 月 10 日～15 日の間、人文科学グループの５名を受け入れた。

[5] 50p にも関連記事を記載。

（オ）Thailand Mahidol Wittayanusorn School(MWIT)との交流

MWIT との関係は 2005 年に始まり、2015 年から 10 名程度の生徒の相互訪問を行っている。

今年度は、10 月 15 日～21 日の間、10 名の生徒 2 名の教員を受け入れ、2024 年 1 月 28 日～2 月 4 日の間、8 名の生徒が MWIT を訪問した。

また、MWIT とは交流期間の長さに関わらず MOU を締結していなかったが、今回 MOU を確認できたことは収穫であった。

（カ）海外のコンテスト・コンクールへの参加

SISTEMIC2023 参加

SISTEMIC(Singapore International STEM Innovation Challenge)は、シンガポール教育省が主催し、2 年に一度、本校の姉妹校である National Junior College (NJC)を会場として開催される、世界最大規模の高校生科学コンペである。2021 年までは SISC(Singapore International Science Challenge)という名称であったが、世界的な STEM 教育重視の流れを受けて、名前を変更している。本庄学院は NJC の姉妹校であることもあり、第 1 回から招待を受けている。コロナ禍以降としては、15 カ国から 62 校が参加する大規模なイベントで、コロナ禍以前以上の規模となった。日本からは本校を含む 3 校が参加している。今回は、5 月 24 日（水）～29 日（火）の間、実施され、3 名の生徒が参加した。研究部門で、”Promising Sustainability Award”を受賞することができた。

International Ironman Creativity Contest2023 参加

IICC(International Ironman Creativity Contest)は台湾教育部・台湾大学が主催する、高校生の創造性教育を目的とした国際コンテストである。今年度は、台北市の世新大学を会場として8月16日～21日の日程で開催された（16日集合、17日遠足、18日～21日コンテスト)。本庄学院は2005年より招待参加している（コロナ禍中は中止)。

（キ）韓国セロナム高校との学術交流

2021 年に新しい試みとして始まった韓国テジョン市のセロナム高校とのオンライン学術交流を継続している。

昨年度の内容をベースに、両国の参加生徒・教員により目標や進行方法等を協議しながら決定していった。テーマは持続可能な開発目標（SDGs）に関する日韓両国の課題とし、日韓の生徒が6名程度のチームを組んで共同研究することになった。使用言語はすべて英語とした。

5月頃までに打ち合わせを進め、参加生徒を募集した。希望した17名の生徒を6チームに編成（マッチング）した。セロナム高校からもほぼ同数の参加があった。各チームの生徒たちはチームごとに月例ミーティングを重ねながら研究を進め、オンラインによる中間報告会、および最終シンポジウム（1月8日）に臨んだ。シンポジウムでは各チームによる共同研究発表と質疑応答があり、教員による講評を行った。報告会・シンポジウムのツールはZOOMを使用した。

本年度の新しい試みとしては、直接学術交流を行うメンバーのほかに、先方のスタッフと協議しながら通年で交流をコーディネートする「マネージャー」を登用することにした点である。マネージャーには主体的に交流を作り上げ、相手校のスタッフと協議しながら本学院のチームメ

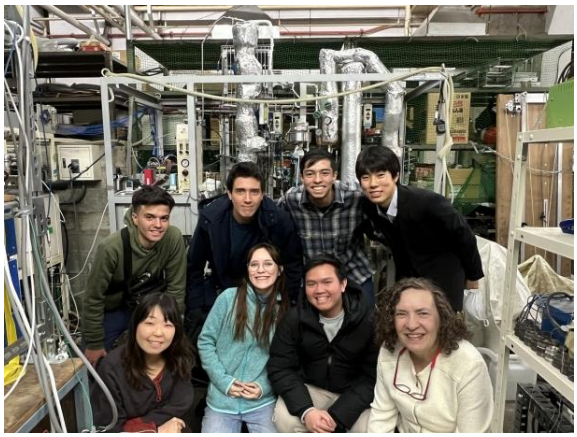
ンバーをリードする役割を担ってもらった。シンポジウムでは司会進行も担当した。
　同じアジアの高校生どうしとはいえ、言語・文化・学事日程の異なる日韓の生徒が直接顔を合わせないまま協働して研究を進めるのは容易ではない。対面での交流がかなわないなかで、生徒たちの相互理解を深める仕掛けづくりに工夫が必要である。
　例年シンポジウムについては両校の生徒と教員のみが参加して行う形式をとっているが、今後は広く公開することや、他校の参加についても検討したい。また、両国の出入国制限がコロナ禍以前と同様に戻ったこともあり、セロナム高校からは対面交流の提案が寄せられている。次年度の実施について協議する計画である。

（ク）アルゼンチンからの高校生・大学生の訪問交流
　JST 主催のさくらサイエンスプログラムにおいてアルゼンチンの Huechulafquen Science Club から、宇宙線をはじめとした素粒子物理の技術探究をテーマとした教員、大学生、高校生の計 5 名を 1/25-31 の日程で招聘し交流を行った。
　早稲田大学理工学部の研究室やミュージアムの訪問の他、本校生徒との草津温泉での放射線測定や理化学研究所の加速器の見学を行った。また、学校では、生徒たちが研究を行っている河川や古墳の見学を行い、学院生との素粒子物理学に関するコラボレーション研究、ほか授業体験やお茶会を学院生と体験した。招聘者、本校生徒共に貴重な交流の機会となった。

草津での足湯体験

理化学研究所の加速器見学

早稲田大学理工学術院片岡研究室


早稲田大学理工学術院中垣研究室

物理の授業での実験体験

本校生徒が宇宙線探査を行っている
秋山庚申塚古墳

本庄早稲田の杜ミュージアム

生徒が研究を行っている本庄市内の河川

共同研究の様子

お茶会体験

文化交流の様子

2.6 高大一貫教育

2.6.1　学部説明会

第 2 学年の生徒全員を対象に早稲田大学全ての学部の説明会を実施した。5 月 27 日（土）に早稲田キャンパス、10 月 13 日(金)には早稲田大学所沢キャンパスへ訪問した。目的は、大学生の息づかいを感じ、自身の高校生活の意義を見つめ直すこと。何のために大学生になるのか深く考える機会を持つこと。学部の教育内容・特徴を十分理解し目標設定・進路選択へ繋げる機会とすることであった。生徒たちは大変貴重な経験を積むことができた。

＜5 月 27 日（土）早稲田キャンパスにて実施＞

法学部、文学部、文化構想学部、教育学部、政治経済学部、商学部

期間理工学部、創造理工学部、先進理工学部、国際教養学部

＜9 月 21 日（木）本庄キャンパスにて実施＞

社会科学部

＜10 月 13 日（金）所沢キャンパスにて実施＞

人間科学部、スポーツ科学部

また、学部説明会は本学院が計画実施しているイベントであるが、学部側からも積極的に学部理解を深めることを目的として、本学院に向けた説明会が開催されている。2023 年度実施されたものとしては以下の通りである。

- 9 月 11 日（日）「法学部への招待」
  学院生・保護者対象
- 9 月 16 日（土）「日本医科大学説明会」
  学院生・保護者対象

2.6.2　学部開放科目（高校生特別聴講制度）

高校生特別聴講制度とは、大学生と一緒に、早稲田大学の正規授業を受講できる制度である。早稲田大学では、全国の高校生のために、学問への関心や進路決定の手助けになるように、正規授業を高校生へ開放している。

附属校である本学院は、授業料を全額免除になるほか、取得した単位は大学での正規の単位として認定されるため、大学教育の先取りとなっている。

［受講期間］9 月下旬～1 月（週 1 回 90 分）

［受講費用］無料（実習を伴う科目は実習料が必要）

［受講場所］早稲田大学各キャンパスまたはオンデマンド（受講科目による）

［開講科目］以下の表の通り

| No. | 箇所名 | 科目名 | 教員名 | 学期 | 単位数 | キャンパス | 募集時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 50 | グローバル | 数学基礎プラスγ(解析学編) 01 | 高木 悟 他 | 夏クォーター | 1 | - | 春 | |
| 51 | グローバル | 数学基礎プラスγ(解析学編) 02 | 高木 悟 他 | 秋クォーター | 1 | - | 夏 | |
| 52 | グローバル | Introduction to University Mathematics (Calculating Interest) A 01 | 曽布川 拓也 | 春クォーター | 1 | - | 春 | |
| 53 | グローバル | Introduction to University Mathematics (Calculating Interest) A 02 | 曽布川 拓也 | 秋クォーター | 1 | - | 夏 | |
| 54 | グローバル | Introduction to University Mathematics (Calculating Interest) B 01 | 曽布川 拓也 | 夏クォーター | 1 | - | 春 | |
| 55 | グローバル | Introduction to University Mathematics (Calculating Interest) B 02 | 曽布川 拓也 | 冬クォーター | 1 | - | 夏 | |
| 56 | グローバル | Introduction to University Mathematics (Optimization Problem) A 01 | 曽布川 拓也 | 春クォーター | 1 | - | 春 | |
| 57 | グローバル | Introduction to University Mathematics (Optimization Problem) A 02 | 曽布川 拓也 | 秋クォーター | 1 | - | 夏 | |
| 58 | グローバル | Introduction to University Mathematics (Optimization Problem) B 01 | 曽布川 拓也 | 夏クォーター | 1 | - | 春 | |
| 59 | グローバル | Introduction to University Mathematics (Optimization Problem) B 02 | 曽布川 拓也 | 冬クォーター | 1 | - | 夏 | |
| 60 | グローバル | 視覚的に捉える群論入門 01 | 高木 悟 | 夏クォーター | 1 | - | 春 | |
| 61 | グローバル | 視覚的に捉える群論入門 02 | 高木 悟 | 冬クォーター | 1 | - | 夏 | |
| 62 | グローバル | 素数の魅力と暗号理論 | 野口 和範 | 秋クォーター | 1 | - | 夏 | |
| 63 | グローバル | データ科学入門α 01 | 小林 学 他 | 春クォーター | 1 | - | 春 | ※附属校のみ開放 |
| 64 | グローバル | データ科学入門α 02 | 小林 学 他 | 夏クォーター | 1 | - | 春 | ※附属校のみ開放 |
| 65 | グローバル | データ科学入門α 03 | 小林 学 他 | 秋クォーター | 1 | - | 夏 | ※附属校のみ開放 |
| 66 | グローバル | データ科学入門α 04 | 小林 学 他 | 冬クォーター | 1 | - | 夏 | ※附属校のみ開放 |
| 67 | グローバル | データ科学入門β 01 | 野村 亮 他 | 春クォーター | 1 | - | 春 | ※附属校のみ開放 |
| 68 | グローバル | データ科学入門β 02 | 野村 亮 他 | 夏クォーター | 1 | - | 春 | ※附属校のみ開放 |
| 69 | グローバル | データ科学入門β 03 | 野村 亮 他 | 秋クォーター | 1 | - | 夏 | ※附属校のみ開放 |
| 70 | グローバル | データ科学入門β 04 | 野村 亮 他 | 冬クォーター | 1 | - | 夏 | ※附属校のみ開放 |
| 71 | グローバル | Introduction to Data Science α 01 | 堀井 俊佑 他 | 春クォーター | 1 | - | 春 | |
| 72 | グローバル | Introduction to Data Science α 03 | 堀井 俊佑 他 | 秋クォーター | 1 | - | 夏 | |
| 73 | グローバル | Introduction to Data Science β 03 | 堀井 俊佑 他 | 秋クォーター | 1 | - | 夏 | |
| 74 | グローバル | 潜在構造のデータ科学 01 | 野村 亮 他 | 春クォーター | 1 | - | 春 | |
| 75 | グローバル | 潜在構造のデータ科学 02 | 野村 亮 他 | 夏クォーター | 1 | - | 春 | |
| 76 | グローバル | 潜在構造のデータ科学 03 | 野村 亮 他 | 秋クォーター | 1 | - | 夏 | |
| 77 | グローバル | 潜在構造のデータ科学 04 | 野村 亮 他 | 冬クォーター | 1 | - | 夏 | |
| 78 | グローバル | 情報科学の基礎 01 | 中村 優一 他 | 春クォーター | 1 | - | 春 | |
| 79 | グローバル | 情報科学の基礎 03 | 中村 優一 他 | 秋クォーター | 1 | - | 夏 | |
| 80 | グローバル | プログラミング入門 01 | 細谷 剛 他 | 春クォーター | 1 | - | 春 | |
| 81 | グローバル | プログラミング入門 03 | 細谷 剛 他 | 秋クォーター | 1 | - | 夏 | |
| 82 | グローバル | Introduction to Programming 01 | 齋藤 恵 他 | 春クォーター | 1 | - | 春 | |
| 83 | グローバル | Introduction to Programming 03 | 齋藤 恵 他 | 秋クォーター | 1 | - | 夏 | |
| 84 | グローバル | プログラミング初級(C/C++) 01 | 齋藤 恵 他 | 春クォーター | 1 | - | 春 | |
| 85 | グローバル | プログラミング初級(C/C++) 03 | 齋藤 恵 他 | 秋クォーター | 1 | - | 夏 | |
| 86 | グローバル | プログラミング初級(Java) 01 | 細谷 剛 他 | 春クォーター | 1 | - | 春 | |
| 87 | グローバル | プログラミング初級(Java) 03 | 細谷 剛 他 | 秋クォーター | 1 | - | 夏 | |
| 88 | グローバル | カーボンニュートラルと社会(学部生用) | 有村 俊秀 他 | 春クォーター | 1 | - | 春 | |

**2)高校生特別聴講制度開放科目**

2022年1月21日現在

| No. | 箇所名 | 科目名 | 教員名 | 学期 | 単位数 | キャンパス | 募集時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 法学 | 総合講座「法批判への招待」 | 弓削 尚子 他 | 秋学期 | 2 | 早稲田 | 夏 | |
| 2 | 法学 | 総合講座「ドイツ語圏を知る」 | 岡山 具隆 他 | 春学期 | 2 | 早稲田 | 春 | |
| 3 | 法学 | 総合講座「ことばと法・社会」 | 星井 牧子 他 | 秋学期 | 2 | 早稲田 | 夏 | |
| 4 | 法学 | 導入講義（選択）―法曹の仕事を知る― | 白石 大 | 春学期 | 2 | 早稲田 | 春 | |
| 5 | 法学 | 先端科学技術と法入門 | 肥塚 肇雄 他 | 秋学期 | 2 | 早稲田 | 夏 | |
| 6 | 教育 | 図書館概論 A | 雷嶋 宏一 | 春学期 | 2 | 早稲田 | 春 | |
| 7 | 教育 | 地球生命史 | 川辺 文久 | 春学期 | 2 | 早稲田 | 春 | |
| 8 | 商学 | ビジネス入門 1 | 山野井 頌一 他 | 春学期 | 2 | - | 春 | ※附属・系属校のみ開放 |
| 9 | 文構 | ギリシャ・ローマ世界入門 | 宮城 徳也 他 | 春学期 | 2 | - | 春 | |
| 10 | 文構 | 日本史・世界史再発見 | 小二田 章 他 | 春学期 | 2 | - | 春 | |
| 11 | 文構 | 言語学入門 | 森田 彰 | 春学期 | 2 | 早稲田 | 春 | |
| 12 | 文構 | ヨーロッパのことばと文化 | 酒井 智宏 | 秋学期 | 2 | 戸山 | 夏 | |
| 13 | 文構 | オペラ論 | 村井 翔 | 秋学期 | 2 | - | 夏 | |
| 14 | 文構 | 精神分析入門 | 村井 翔 | 春学期 | 2 | - | 春 | |
| 15 | 文構 | 現代文芸・文化論1 | 市川 真人 | 春学期 | 2 | 戸山 | 春 | |
| 16 | 文構 | 現代文芸・文化論2 | 市川 真人 | 秋学期 | 2 | 戸山 | 夏 | |
| 17 | 文構 | 日常生活の社会学 | 大久保 孝治 | 春学期 | 2 | - | 春 | |
| 18 | 文 | 初級ギリシャ語（速修） | 兼利 琢也 | 春学期 | 4 | 戸山 | 春 | |
| 19 | 文 | 初級ラテン語（速修） | 小倉 博行 | 春学期 | 4 | 戸山 | 春 | |
| 20 | 文 | ギリシャ・ローマの思想と文化 | 宮城 徳也 他 | 秋学期 | 2 | - | 夏 | |
| 21 | 文 | 心理学概論1 | 小塩 真司 他 | 春学期 | 2 | - | 春 | |
| 22 | 文 | 心理学概論2 | 福川 康之 他 | 秋学期 | 2 | - | 夏 | |
| 23 | 文 | 日本考古学概説 | 長崎 潤一 他 | 春学期 | 2 | - | 春 | |
| 24 | 文 | 人文地理学1 | 本木 弘悌 | 春学期 | 2 | - | 春 | |
| 25 | 基幹 | 基礎の数学 基幹(2)-II | 奥村 克彦 | 春学期 | 2 | 西早稲田 | 春 | ※附属・系属校のみ開放 |
| 26 | 基幹 | 基礎の数学 基幹(4)-II | 木村 晃啟 | 春学期 | 2 | 西早稲田 | 春 | ※附属・系属校のみ開放 |
| 27 | 基幹 | 数学A2（線形代数） 基幹(6) | 柳谷 晃 | 通年@秋期 | 5 | 西早稲田 | 春 | ※附属・系属校のみ開放 |
| 28 | 基幹 | Cプログラミング入門 基幹(3) | 吉岡 剛志 | 春学期 | 2 | 西早稲田 | 春 | ※附属・系属校のみ開放 |
| 29 | 基幹 | Cプログラミング入門 基幹(7) | 寺田 晃太朗 | 春学期 | 2 | 西早稲田 | 春 | ※附属・系属校のみ開放 |
| 30 | 基幹 | Cプログラミング 基幹(5) | 金井 謙治 | 秋学期 | 2 | 西早稲田 | 夏 | ※附属・系属校のみ開放<br>※「Cプログラミング入門」の習得が前提条件 |
| 31 | 創造 | 建築意匠と歴史 | 小岩 正樹/古谷 誠章 | 春学期 | 2 | 西早稲田 | 春 | |
| 32 | 先進 | 力学A 電生 | 山田 章一 | 春学期 | 2 | 西早稲田 | 春 | ※附属・系属校のみ開放 |
| 33 | 先進 | 力学B 電生 | 辻川 信二 | 秋学期 | 2 | 西早稲田 | 夏 | ※附属・系属校のみ開放 |
| 34 | 先進 | 基礎化学A | 鹿又 宣弘 | 春クォーター | 2 | 西早稲田 | 春 | ※附属・系属校のみ開放 |
| 35 | 先進 | 基礎化学B | 石原 浩二 | 夏クォーター | 2 | 西早稲田 | 春 | ※附属・系属校のみ開放 |
| 36 | 先進 | 生命医科学ゼミナールI | 朝日 透 他 | 春学期 | 2 | 西早稲田 | 春 | ※附属・系属校のみ開放 |
| 37 | 先進 | 電気・情報生命工学フロンティア | 石山 敦士 他 | 春学期 | 2 | 西早稲田 | 春 | ※附属・系属校のみ開放 |
| 38 | 先進 | 生命科学概論B 生医 | 井上 貴文 他 | 春学期 | 2 | 西早稲田 | 春 | ※附属・系属校のみ開放 |
| 39 | グローバル | 数学基礎プラスα（金利編） 01 | 髙木 悟 他 | 夏クォーター | 1 | - | 春 | |
| 40 | グローバル | 数学基礎プラスα（金利編） 02 | 髙木 悟 他 | 秋クォーター | 1 | - | 夏 | |
| 41 | グローバル | 数学基礎プラスα（金利編） 03 | 髙木 悟 他 | 春クォーター | 1 | - | 春 | |
| 42 | グローバル | 数学基礎プラスα（最適化編） 01 | 髙木 悟 他 | 夏クォーター | 1 | - | 春 | |
| 43 | グローバル | 数学基礎プラスα（最適化編） 02 | 髙木 悟 他 | 秋クォーター | 1 | - | 夏 | |
| 44 | グローバル | 数学基礎プラスβ（金利編） 01 | 髙木 悟 他 | 夏クォーター | 1 | - | 春 | |
| 45 | グローバル | 数学基礎プラスβ（金利編） 02 | 髙木 悟 他 | 秋クォーター | 1 | - | 夏 | |
| 46 | グローバル | 数学基礎プラスβ（最適化編） 01 | 髙木 悟 他 | 夏クォーター | 1 | - | 春 | |
| 47 | グローバル | 数学基礎プラスβ（最適化編） 02 | 髙木 悟 他 | 秋クォーター | 1 | - | 夏 | |
| 48 | グローバル | 数学基礎プラスγ（線形代数学編） 01 | 髙木 悟 他 | 夏クォーター | 1 | - | 春 | |
| 49 | グローバル | 数学基礎プラスγ（線形代数学編） 02 | 髙木 悟 他 | 秋クォーター | 1 | - | 夏 | |

［出願期間］5 月 24 日（月）～5 月 31 日（月）

2.6.4　安全配慮義務プログラム

「安全配慮義務」の実践プログラムとして 5 月 24 日に競技スポーツガイダンス「緊急連絡体制について」、6 月 14 日に運動部生徒を対象に熱中症対策講座、7 月 5 日に救命講習（AED 講習）を実施した。感染状況に応じて人数制限をする可能性があったが、コロナが第 5 類となったため、例年どおり全てのプログラムを実施することができた。

2.7 生徒指導

2.7.1　生徒指導の方針

本学院の生徒はおおむね高度な学力・理解力を有しており、また生活態度も模範的であり、深刻な生徒指導事案が起こることは稀である。とはいえ、成績不振や遅刻・欠席超過に陥るケースが全くないわけではない。対人関係のトラブル、あるいは日々ハイレベルな競争にさらされることにより精神的な不調を訴えることもある。

いじめや中傷、盗難、SNS トラブルの防止といった従来からの生徒指導目標についても達成できるよう努力を継続した。移動教室での盗難事件防止のための巡回、「いじめアンケート」の実施、集会での講話などを通じ、学院生としての矜持を高めるよう指導に努めた。次年度以降においても、いかにして学院生の満足度を高め、充実した生活を送れるようにするかが問われている。

2.7.2　2023 年度の状況

停学・謹慎を伴う生徒指導案件は年間で 8 件であった。飲酒、喫煙、SNS の不適切投稿等が該当した。本年度は特に異性間の交遊関係トラブルに起因する指導案件が目立ち、丁寧なフォローを要するケースが複数みられた。保健室や相談室との連携により、対処を強化していく必要性がある。

また、レポートにおける盗用や生成 AI の使用が発覚し、指導を行ったケースが複数見られたため、不正使用防止の取り組みが来年度の課題となった。

## ３．生徒

### 3.1　生徒受入　（入学試験）

#### 3.1.1　入学試験全般（志願者数・入寮者数、出身都道府県等）

- 志願者総数は 3,167 名であり、一般・帰国生入試では、東京都が増加した一方で，神奈川県が前年度に引き続き減少した。千葉県は微増となった。
- 入学予定者 329 名で、男子 181 名（55%）、148 名（45%）である。
- α 選抜では、志願者数が増加し（前年度比＋40 名）、女子が大きく増加した。
- Ⅰ選抜の志願者数は、前年度比－９名となった。コロナ以降で減少した受験者数が回復しない状況が続いている。
- 帰国生入試・Ⅰ選抜を合わせた志願者数は 273 名で、前年度比＋14 名となった。昨年度よりは微増したものの、世界的な新型コロナウイルス感染症の影響により、志願者数の低迷が続いている。
- 学院説明会は、第１～第３回を対面とオンラインの併用で開催した。
- 入学者の出身中学校所在地別の人数は以下のとおり。

| 全体 | 埼玉県 | 東京都 | 神奈川県 | 千葉県 | 群馬県 | 他道府県 | 海外 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 2023 年 | 123 | 89 | 19 | 25 | 22 | 16 | 30 |
| 2024 年<br>(329 名) | 118 | 104 | 23 | 12 | 17 | 21 | 34 |
| | 35.9 % | 31.6 % | 7.0 % | 3.6 % | 5.2 % | 6.4 % | 10.3 % |

#### 3.1.2　広報・学校説明会

- 学院説明会は昨年度に続き，全ての回（３回）を対面とオンラインの併用で行った。これにより、海外に住む受験生にも本学院の情報にアクセスする機会を増やすことができた。なお、動画配信は定員を設けず、対面参加者も動画配信を視聴できることとした。
- 遠方になるほど動画配信のみでの参加者が多くなり、特に海外在住者は参加者の約 95%が動画での配信での参加となった。
- 海外在住者向け学校説明会を，６・７月に分散して実施した。従来の学校説明とキャンパス見学に加え、模擬授業および生徒による学校紹介の時間を設けた。
- 10 の外部の説明会・相談会に参加し、全体説明および個別相談を行った。

#### 3.1.3　入試実施体制

α・Ⅰ選抜の面接試験当日に、上越・北陸新幹線の運転見合わせが生じた。大幅に遅刻する受験生はいなかったが、来校できなかった受験生１名について、急きょオンライン面接に切り替える措置を取った。

#### 3.1.4　入学試験

（ア）一般入学試験・帰国生入学試験

入学者の内訳は一般男子 92 名、一般女子 80 名、帰国生男子 13 名、帰国生女子４名となった。

（イ）α 選抜（自己推薦入試）
志願者数は昨年度よりも増加し、全体で 270 名であった。男子 104 名、女子 166 名となった。

（ウ）Ⅰ選抜（帰国生自己推薦入試）
志願者数 72 名で、合格者 20 名となった。

3.1.5　指定校推薦
一般指定校からの入学者は男子 9 名、女子 17 名（指定 32 校中）となった。
地元指定校からの入学者は男子 8 名、女子 7 名となった。

3.2　入学決定者の集い
2 月 24（土）に実施した。毎年、入学手続者がおおよそ確定した土曜日に入学希望者を集めて、教員からの挨拶、模擬授業、生徒によるミニコンサート、校歌歌唱指導、應援部からのエールの内容で実施しているイベントである。
終了後に参加者に集いの感想を記述式アンケートで求めた結果、大多数の生徒から本学院への入学の期待と、勉強する意欲が増したという回答を得た。事務的な連絡等になりがちな集会であるが、新たな試みで入学前の不安を払しょくできたのではないかと考えている。

４．生徒への配慮
4.1　奨学金
2023 年度奨学金の状況は以下の通りである。

| 奨学金名 | 受給者数 |
|---|---|
| 横浜市高等学校奨学金 | 1 |
| 茂木本家教育募金 | 4 |
| 古岡奨学会 | 1 |
| 埼玉県高等学校等奨学金 | 8 |
| 東京都育英資金 | 1 |
| あしなが育英会 | 1 |
| 群馬県教育文化事業団高等学校等奨学金 | 1 |
| 加藤山崎奨学金 | 2 |
| 大隈記念 | 8 |
| 小野梓記念 | 12 |
| 早稲田カード | 3 |
| 早大生協給付 | 1 |
| 校友会給付 | 4 |
| 本庄高等学院 | 3 |

4.2　保健室
4.2.1　健康診断
生徒定期健康診断：4 月 20 日（木）実施
感染対策を講じた上で、1 時間目から 4 時間目にかけて全学年実施した。欠席等の未受診者には後日実施し、全生徒が実施できた。

4.2.2　健康相談
内科、眼科、耳鼻咽喉科、歯科、整形外科の各校医等による個別健康相談を実施した。今年度から新たに産婦人科（校医）の健康相談を実施し、女子の月経に関わる症状等の相談に対応できるようにした。

4.2.3　感染症対策
5 月より新型コロナウイルス感染症が 5 類感染症へ移行したため、これまでと感染対策のレベ

ルが大きく変化した。しかしながら流行は繰り返し、体育祭後には新型コロナウイルス感染症、文化祭後にはインフルエンザ A 型が大きく流行し、一斉休校措置をとることとなった。イベント後の感染拡大の防止については引き続き課題であり、イベント前から徹底した対策をする必要がある。その他、年間にわたり学級閉鎖を複数回実施し、学校内での感染拡大を防止した。

4.2.4　カウンセリング

週２回相談室を開室し、大学学生相談室所属のカウンセラーが生徒や教職員の相談に対応している。今年度は相談枠を 2 枠増やし、相談件数の増加に対応できるように配慮した。結果、昨年度よりは比較的予約が取りやすくなった。

4.3　リハビリコンディショニングルーム

運動部サポートの一環として、月 1 回程度トレーナーによるスポーツ障害相談を実施した。13 回開室で延べ 38 名が利用し、5 回部活指導にあたった。個別の運動障害に対し丁寧にリハビリ・トレーニングを指示して成果を得た。次年度も多くの生徒が利用できるよう周知したい。

4.4　共済見舞金

本学院では生徒の疾病・不慮の事故・災害等による医療費を相互扶助によって補助し、保護者の経済的負担を軽減することを目的に、独自の共済制度を設け、全生徒から年額 5,000 円を徴収している。2015 年度から、より公平でわかりやすいシステムを目指し、現行制度の運用を開始した。これにより、本規程の所管箇所である早稲田大学学生部が大学生を対象に運営する学生健康増進互助会の基本的な考え方やルールに沿った医療給付制度となった。

2018 年度、2019 年度と 2 年続けて赤字の収支決算となったため、2020 年度より財政健全化を目指し自己負担額の増加、給付額上限の引下げ、日本スポーツ振興センターとの併用不可、という制度改革を実施している。過去 6 年度分の支給実績は次の通りである。

| 年度 | 2018 | 2019 | 2020 | 2021 | 2022 | 2023 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 支給人数（延べ） | 916 | 891 | 451 | 423 | 373 | 236 |
| 支給人数（実数） | 294 | 247 | 136 | 136 | 110 | 84 |
| 支給上限額到達者 | 11 | 11 | 4 | 5 | 2 | 3 |
| 支給金額（円） | 5,092,429 | 4,910,736 | 1,915,688 | 1,925,249 | 4,079,574 | 959,583 |

4.5　学校安全管理

4.5.1　安全管理体制

本学院のキャンパスは浅見山とよばれる丘陵地にあり、85万平方メートルにおよぶ広大な敷地を有している。古墳群が点在し、オオタカ等の野生生物保護のため、環境保全の必要にも迫られている。そのような特殊な事情により、学校を外部から物理的に遮蔽する塀や門を設けることができない。そのため、日直にあたる教員が校地を巡回し不審者の侵入防止・発見に努めるほか、下校時刻の遵守指導を行っている。

これに加えて、外部委託によるキャンパス管理室を設置し、24時間体制で巡回を行うなどセキュリティを強化している。キャンパス内外をつなぐ出入口や建物の開口部には防犯カメラを設置し、校舎にも最新の入退出管理機器を設置するなど監視体制も整えている。2023年度には不審者の侵入を防ぐために、約２ｋｍにおよぶ柵を設置して、囲繞地化を行った。

本庄キャンパス全体としては、労働安全衛生法第 19 条第 1 項に規定される安全衛生委員会が設置され、本学院を含むキャンパス内各箇所から委員が選出されている。委員会は毎月定例で開催され、キャンパス内の安全衛生全般について報告や確認を行なっている。

また、4月には消防署の協力により防災訓練を実施し、災害発生時の避難経路の確認、防災意識の高揚を図った。

4.5.2　交通安全指導

自転車による通学経路を指定し、指導を続けている。具体的には4月、9月、１月に早苗寮前、高崎線歩道橋南側ロータリー、稲稜ホール入口にて自転車走行の指導を行った。電車通学の生徒については、電車通勤の教員が中心となって生徒の乗車状況を確認し、ホーム上での危険防止（歩きスマホの指導）等にあたっている。大事には至らなかったが、寮生で、自転車と車が接触する事故が複数件あった。今年度から、ヘルメットの着用が努力義務化され、本学院でも積極的な着用を呼び掛けた（原則は着用と指導）。本庄市内で鍵をかけたまま自転車を置いておき、盗難にあうケースが多く発生しているため、本庄警察署警察官が複数回来校し、駐輪場で指導、声掛けを行った。

4.5.3　防災訓練

全校生徒・教職員を対象とした防災訓練を毎年に実施している。2023年度は4月27日（木）に火災が起こったことを想定し、消防署の指導による消火訓練なども含め実施した。

4.6 ダイバーシティへの取り組み

早稲田大学ではダイバーシティ推進に取り組んでおり、附属校である本学院もその指導を受けながら推進に取り組んでいる。具体的には以下の取り組みの努力を重ねている。

(ア)研修の推進

今年は4月3日に、非常勤講師を含め、大学のダイバーシティ推進室から講師を招き、性多様性と学校としての対応をテーマとして講習会を実施した。

(イ)性多様性への配慮

本学院では、生徒・教職員の性多様性に対して、以下の配慮を行っている。

- その場にセクシャルマイノリティがいることを前提として接する。性別二元論、異性愛やシスジェンダーを前提として話すなど、当事者の存在を否定するような言動はとらない。
- 見た目や氏名でジェンダー・セクシュアリティを決めつけない。
- 生徒に呼びかける場合は、共通の（または本人の希望に沿った）敬称を使用する（「さん」「君」の呼称で呼び分けない。「さん」「君」あるいは呼び捨てで統一する。）
- 差別的なニュアンスを持つ言葉やジェスチャーは使わない。生徒にも使わないよう指導する（オカマ、ホモ、レズ、男女、あっち、そっち系など）

５．生徒進路

5.1　進学学部

5.1.1　学部決定の方法

（ア）総得点方式

成績の上位者から順番に、希望の学部学科に推薦する。

（イ）G選抜方式（2023 年度で終了）

学部受け入れ枠の最大 10%を上限として、学業成績だけでなく思考力や判断力、意欲、主体性など多面的評価によって学部推薦を決定する。本年度は１名が入学した。

(ウ)日本医科大学への推薦

推薦条件を満たした希望者から、成績や諸活動および意欲などを総合的に評価し推薦者を決定する。本年度は２名が入学した。

**2024年度入学推薦枠数/2024年度学部進学者数（学部・男女別）**

| 学部 | 学科 | 専修 | 2024年度入学推薦枠数 | | 2024年度学部進学者数 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 学科定員 | 学部合計 | 計 | 男子 | 女子 | 学部合計 |
| 政治経済学部 | 政治学科 | | 25(±3) | 73 | 25 | 6 | 19 | 73 |
| | 経済学科 | | 33(±3) | | 31 | 8 | 23 | |
| | 国際政治経済学科 | | 15(±3) | | 17 | 7 | 10 | |
| 法学部 | | | 44 | 44 | 44 | 20 | 24 | 44 |
| 文化構想学部 | 文化構想学科 | | 21 | 21 | 21 | 10 | 11 | 21 |
| 文学部 | 文学科 | | 16 | 16 | 16 | 8 | 8 | 16 |
| 教育学部※ | 教育学科 教育学専攻 | 教育学専修 | 5 | 40 | 2 | 1 | 1 | 28 |
| | | 生涯教育学専修 | 4 | | 2 | 2 | 0 | |
| | | 教育心理学専修 | 2 | | 2 | 1 | 1 | |
| | 初等教育学専攻 | | 2 | | 2 | 0 | 2 | |
| | 国語国文学科 | | 8 | | 3 | 2 | 1 | |
| | 英語英文学科 | | 8 | | 1 | 1 | 0 | |
| | 社会科 | 地理歴史専修 | 6 | | 6 | 6 | 0 | |
| | | 公共市民学専修 | 7 | | 4 | 3 | 1 | |
| | 理学科 | 生物学専修 | 2 | | 2 | 1 | 1 | |
| | | 地球科学専修 | 2 | | 0 | 0 | 0 | |
| | 数学科 | | 4 | | 1 | 0 | 1 | |
| | 複合文化学科 | | 4 | | 3 | 3 | 0 | |
| 商学部 | | | 35 | 35 | 35 | 23 | 12 | 35 |
| 基幹理工学部（2年進級時に学科選択） | Mathematical Sciences | | | 38 40 | 0 | 0 | 0 | 26 |
| | 学系Ⅰ | | 10 | | 1 | 1 | 0 | |
| | 学系Ⅱ | | 28 | | 18 | 14 | 4 | |
| | 学系Ⅲ | | 7 | | 7 | 5 | 2 | |
| 創造理工学部 | 建築学科 | | 12 | 35 | 8 | 3 | 5 | 26 |
| | 総合機械工学科 | | 7 | | 2 | 2 | 0 | |
| | 経営システム工学科 | | 7 | | 7 | 5 | 2 | |
| | 社会環境工学科 | | 5 | | 5 | 4 | 1 | |
| | 環境資源工学科 | | 4 | | 4 | 3 | 1 | |
| 先進理工学部 | 物理学科 | | 4 | 34 | 0 | 0 | 0 | 18 |
| | 応用物理学科 | | 5 | | 2 | 1 | 1 | |
| | 化学・生命化学科 | | 3 | | 3 | 2 | 1 | |
| | 応用化学科 | | 6 | | 1 | 1 | 0 | |
| | 生命医科学科 | | 3 | | 3 | 0 | 3 | |
| | 電気・情報生命工学科 | | 13 | | 9 | 8 | 1 | |
| 社会科学部※ | 社会科学科 | | *20* | *20* 20 | 20 | 3 | 17 | 20 |
| | TAISIプログラム | | *(2)*★ | | 0 | 0 | 0 | |
| 人間科学部※ | 人間環境科学科 | | 4 | 12 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| | 健康福祉科学科 | | 4 | | 0 | 0 | 0 | |
| | 人間情報科学科 | | 4 | | 1 | 1 | 0 | |
| スポーツ科学部 | スポーツ科学科 | | 6 | 6 | 1 | 0 | 1 | 1 |
| 国際教養学部 | 国際教養学科 | | 13 | 13 | 13 | 5 | 8 | 13 |
| 日本医科大学医学部 | | | 2 | 2 | 2 | 1 | 1 | 2 |
| 合計 | | | 391 | | 324 | 161 | 163 | 324 |

## ６．教員の活動

### 6.1　教員の研究活動

#### 6.1.1　特別研究期間

本校では毎年 3 名を上限に、最長 1 年間の特別研究期間（サバティカル）を取ることができる。本年度の希望者は 0 名であった。

#### 6.1.2　研究紀要

本学院専任教員、非常勤講師等が執筆した研究論文や調査報告を掲載し、年 1 回刊行している。2023 年度は研究紀要第 42 号を発行し、論文 3 本と退職教員 1 名の略歴・業績を掲載した。

・課外講義「これがサイエンスだ！」10 年間の歩みと展望

・高校数学への無限小解析導入の試み

・酒泉「小土山墓」とその魏晋十六国時代の河西における位置

6.1.3　教員の研究成果

【課題研究】

- 早稲田大学特定課題（研究基盤形成）　2023C-271　「公民科の授業で「表現の自由」をどう教えるか」
- 早稲田大学特定課題（研究基盤形成）　2023C-272　「高等学校数学科における探究ベースによる学習活動の設計および実践」
- 早稲田大学特定課題（研究基盤形成）　2023C-570　「高校生によるミュオグラフィをテーマとした学際探究プログラムの開発と実践」
- 早稲田大学特定課題（科研費連動型）　2023R-043　「宇宙線による古墳の透視を題材とした高校生の学際的探究活動コラボレーション」
- 早稲田大学特定課題（科研費連動型）　2023R-044　「超幾何モチーフのレギュレーターと超幾何関数」
- 早稲田大学特定課題（研究基盤形成）　2023C-274　「超幾何モチーフのレギュレーターと超幾何関数」

【論文】

- 三﨑良章「酒泉「小土山墓」とその魏晋十六国時代の河西における位置『早稲田大学本庄高等学院研究紀要』42
- Ryojun Ito, Satoshi Kumabe, Akio Nakagawa, Yusuke Nemoto, 「Kampé de Fériet hypergeometric functions over finite fields 」, Research in Number Theory 9(3) 2023 年 6 月 28 日
- Yusuke Nemoto, 「Regulator of the Hesse cubic curves and hypergeometric functions」, arXiv:2305.12051
- Yusuke Nemoto,「L-function of CM elliptic curves and generalized hypergeometric functions」, arXiv:2309.01059
- Yoshio HOSO　(2023) Considerations on Rubric Assessments within High School Cross-Cultural Understanding Classes Using J-POSTL Language Teacher Education　*Language Teacher Education* Vol.10 ( No.2 ) 45 - 60　2023 年 8 月　［査読有り］
- Miki Ohtsuka et al.　墳Q(fun-Q) project ： muography of Japanese ancient mounds by high school students　PoS ICRC2023 (2023) 1628
- 大塚 未来　教員をつなぐ課外活動「これがサイエンスだ！」　pesj.71.3_175(2023)
- 成瀬政光, 宮川健 (2023)．数学史を用いた定積分についての認識論的分析：探究型授業の設計・実践に向けて．全国数学教育学会誌『数学教育学研究』, 29 (2), pp. 45-61. 査読あり.
- 成瀬政光, 太田洋平, 大塚未来, 根本裕介, 峰真如 (2024). 課外講義「これがサイエンスだ！」10 年の歩みと展望. 早稲田大学本庄高等学院研究紀要『教育と研究』, (42), pp. 1-21.
- 林山まゆり「『般若心経秘鍵』の諸解釈」『印度学仏教学研究』72 巻－2 号 2023 年 3 月［査読有り］
- 羽田真「ウクライナ侵攻と「表現の自由」 」民主主義教育 21 (17)　2023 年 4 月
- 羽田真「公民科における「ジェンダー平等」の教育」水野紀子・窪田充見／編集代表 『家族と子どもをめぐる法の未来 棚村政行先生古稀記念論文集』 第Ⅳ章 家族・社会をめぐる諸問題 日本加除出版 2024 年 3 月

【口頭発表】

- Yusuke Nemoto. 「Some relations among L-functions, regulators and hypergeometric functions 」, 第 19 回北陸数論研究集会「超幾何関数の数論とその周辺」, 金沢大学, 2023 年 11 月 23 日-26 日
- 根本裕介.　「Non-torsion algebraic cycles on the Jacobians of Fermat quotients 」, 九州代数的整数論 2024(KANT2024), 九州大学, 2024 年 2 月 28 日-3 月 1 日

- 根本裕介.「有限体上の Kampé de Fériet 超幾何関数について」, プロジェクト研究集会 2023, ハートピア熱海, 2024 年 3 月 11 日-13 日
- 細喜朗「論理性に注意して話す(発表する)ことを評価するには」 ［招待有り］ KATE 関東甲信越英語教育学会 （文教大学） 2023 年 08 月
- Yoshio HOSO: A Japanese senior high school essay-writing evaluation method based on argumentative writing ASIA TEFL in Korea (Daejeon, Korea) 2023 年 08 月
- 大塚未来 等 「高校生による古墳の宇宙線透視」日本物理学会第 78 回年次大会 領域 13 2023 年 9 月 16 日
- 成瀬政光, 宮川健. 探究型学習のタスクデザインに向けた基本教授モデルの構築：定積分についての基本認識論モデルと教授実験をもとにして. 全国数学教育学会 第 58 回研究発表会 2023 年 6 月 25 日（@広島大学）
- 成瀬政光, 宮川健. 定積分の探究型学習の設計とその実践 ：基本教授モデルをもとにして. 全国数学教育学会第 59 回研究発表会 2023 年 12 月 17 日（@福岡教育大学）
- 田邊潤 手足の重さを利用したマルチエクササイズ用具「グラビティーコード」の開発、日本スプリント学会 2023 年 12 月 9 日（@同志社大学）
- 田邊潤・峰真如 手足の重さを利用した運動用具「グラビティーコード」の理論と効果、日本陸上競技学会 2024 年 2 月 22 日（@中京大学）
- 林山まゆり 「『般若心経秘鍵』の諸解釈」 印度学仏教学会第 74 回大会 2023 年 9 月 2 日（@龍谷大学（zoom））
- 羽田真「「表現の自由」をどう教えるか」 全国民主主義教育研究会 第 53 回全国大会 2023 年 7 月 29 日
- 羽田真「公民科における家族・ジェンダーと法」全国民主主義教育研究会 第 18 回オンライン連続学習会 2023 年 5 月 28 日

6.3 社会活動

6.3.1 学会役員

- 物理教育研究会 運営委員
- 物理教育学会 編集委員
- 映像メディア英語教育学会 専務理事（会員管理担当）
- TALK（田辺英語教育研究会）研究企画委員

6.3.2 学外委員

- 本庄市行政不服審査会委員
- 埼玉県立歴史と民俗の博物館協議会委員
- さいたま市商業等振興審議会委員

6.3.3 学外講師・出張授業等

- 公立大学法人高崎経済大学非常勤講師
- 本庄市市民総合大学講座講師（「世界の３大宗教」全３回）
- 共立女子大学 非常勤講師
- 中央学院大学 非常勤講師

6.3.4 教科書等の執筆

- 「地学基礎」高等学校理科教科書（啓林館）編集協力者
- 「わたしたちの地理総合 世界から日本へ」文部科学省検定教科書 高等学校 地理歴史科用（二宮書店）執筆者
- 「わたしたちの地理総合 世界から日本へ」文部科学省検定教科書 高等学校 地理歴史科用 教師用指導書朱書き編（二宮書店）執筆者
- 「情報 I」、高等学校情報科教科書、日本文教出版 執筆者
- 「物理基礎」文部科学省検定教科書（実教出版） 高等学校理科教科書 執筆者

6.3.5　外部資金の獲得

・ JST さくらサイエンスプラン
　National Junior College（シンガポール）受入資金　　1,684 千円
　ウエチュラフケンサイエンスクラブ（アルゼンチン）受入資金　2,596 千円
・ 日本学術振興会 科学研究費助成事業 奨励研究「高等学校「数学Ⅲ」における探究ベースによる学習活動の設計および実践」（23H05032）. 310 千円
・ 日本学術振興会　科学研究費助成事業　奨励研究「民主主義社会を支える表現の自由をどう教えるか」(23H05062) 320 千円

6.3.6　その他

・ こども大学本庄　学長
・ 図書館運営　図書委員長

７．教育研究施設

7.1　学内施設

7.1.1　教室

教室は普通教室 23、ゼミ室4、理科実験・講義室 5、情報処理室2、美術室 1、体育講義室 2、地理演習室 1、音楽教室1、家庭科調理室1、メディアルーム1、CALL教室 1、大教室1 で構成され、各教室にはIT機器とスクリーンが設置されている。

7.1.2　稲稜ホール

稲稜ホールは約400席のキャパシティを持ち、学年集会や、各学年対象の健康教育講演会、外部有識者による特別講演会の会場として、利用される。その他、音楽の授業やブラスバンド部・グリー部の活動、稲稜祭をはじめとするイベント、演劇部・軽音楽部等の公演会場として常時利用される。また、学外の機関の利用にも供している。

上記を含め年間の施設利用回数は、2023年度は100回を超えており、本学院の教育活動上極めて重要な役割を果たしている。

7.1.3　CALL教室

PC教室に隣接した46名対応の教室である。教卓周辺はスクリーンを使った発表に適した広めのスペースがあり、2名1組の机にはPC、カメラ、マイク付ヘッドホンが備わっている。授業の展開に応じてアクティブラーニングや音声・文書ファイルの配布と回収が可能である。放課後は事前予約制で、発表リハーサルや課外講義、説明会や始業前30分間の「英語朝練」、各種ワークショップにも活用されている。

7.1.4　コンピュータ・インターネット環境

現校舎を使用するようになってから、PC 室 2 室（46 名対応）で多様な授業や課外活動を展開している。PC 室は教科「情報」、情報系の選択科目以外に、情報環境を必要とする様々な教科で使用され、また、休み時間・放課後は生徒に開放され、創作活動・検索活動に役立てている。また全ての教室に LAN の情報コンセントとプロジェクター・スクリーン・書画カメラが設置されている。また校内 3 カ所に無線 LAN のポイントがあり、情報コンセントのない場所でも WiFi でノート PC やタブレット、スマホ等でインターネットへの接続が可能である。

このような環境のため、ノート PC やタブレットを持参する生徒が増えている。校内の至る場所で課題や調べ物に役立てているようである。

ネットワークの帯域幅にもストレスはない。コロナ禍によるオンライン授業が増えたことや、不特定多数の生徒の触れるキーボードを嫌う意識から、自身のノート PC やタブレットを持ち歩く生徒が大幅に増えた。

現在の PC 室は、コンピューターをすべて取り除き、グループ学習などに使用できる多目的ホールに改修の予定である。これに伴い、現在 BYOD(Bring Your Own Device)に完全移行を済ませている。

7.1.5　体育館

2020 年 2 月に完成した体育館は、従来の学院体育館より広いメインアリーナと、部室やトレーニング室、多目的室等が併設された施設である。それ以前より生徒の移動時間も大幅に削減され、冷暖房も完備されたため、より一層充実した授業や部活が実施できている。雨天時も３クラス同時展開が可能のため代替種目の実施も可能となった。また、WiFi を活用して映像を見ながらの授業展開が可能となった。

7.1.6　共通教室棟体育館

主に雨天時の体育や、水・土曜日の部活動で使用申請を行い、活用している。

7.1.7　サッカー場

サッカーコート１面を十分に確保できる広さであり、それを活かしたサッカーの授業展開が可能である。授業や球技大会等行事、クラブ活動と年間を通しての使用頻度は非常に高い。水はけは良好である。

7.1.8　ラグビー場・陸上競技場

陸上競技、ラグビーの授業展開が十分にできる広さである。体育祭、稲稜祭、球技大会等の行事、また災害時の第一避難として定めており、その使用頻度は高い。クラブ活動では、陸上部、ラグビー部が使用している。400m 6 レーンの充実したトラックに加え、幅跳び用ピット、高跳び用マット、投擲用サークルと他種目に取り組める充実した環境である。野球場は、野球部の活動以外では、主にソフトボール、ゴルフの授業で使用している。各種目授業を十分に展開できる広さである。

7.1.9　テニスコート

テニスコート 6 面（クレー4 面・砂入り人工芝 2 面）は、テニスの授業と、クラブ活動では硬式テニス部とソフトテニス部が共用している。

7.1.10　図書室

図書室を頻繁に利用する生徒は少しずつ増えていると思われるが、より多くの生徒に図書室を有効活用してもらえるよう、本学院図書委員会編「図書だより」（年 1 回発行）で生徒によって紹介された図書を特設コーナーを設けて展示紹介している。

元衆議院議員の河野洋平氏より継続的に書籍の寄贈があり、特設コーナーを設けている。

今後も学内関係箇所と連携しつつ、所蔵資料の充実、図書室内の環境整備などに努めたい。

7.1.11　食堂

食堂はホールとパンショップ（購買）から構成されている（運営は早稲田大学生協に委託）。座席数は、約 400 席。４人掛け、６人掛けの他に、１人掛けのテーブルも用意し、多様なニーズにこたえるように改善した。

また、生協のご厚意で、生協会員には食事代の割引や、書籍の割引サービスがある。

食事の時間外では最大 1 学年が集まれる部屋としても活用されている。今年度は 3 学年の学年集会（進路指導、修学旅行事前学習会）、台中一中来校交流会場として活用したほか、「大久保山学」「コミュニケーション英語Ⅲ」の授業内活動（ポスターセッション）でも使用した。

7.2　スクールバス

今年度からコロナ禍前の６台運行に戻った。朝の本庄発バスが込み合う時間帯は台数も多く手配しているため、バスに乗り切れない生徒はほどんど見られなかった。

一方で、朝、通学時に座りたい生徒がバスを１台見送り、バス停が先頭から詰まってしまうケースが見られたことや、最終下校時刻のバスで、バスの出発時間を過ぎてからも乗ろうとしてくる生徒が見られることが来年度の課題である。

また、寄居駅行のバスは、本数が少なく、かつ複数路線（東武東上線、JR 八高線、秩父線）が集まるため、希望する時間の電車に乗れるようなバスダイヤを組むことが難しく、生徒から複数件相談があった。

7.3　生徒寮

7.3.1　早苗寮

昨年度まで行っていた新型コロナウィルス対策を含む寮内ルールを緩和した。同時に、寮生には各自の体調管理や感染症対策を促しながら寮運営を行った。

今年度は、1 学期に新入生歓迎会、2 学期にクリスマス会と、2 度の寮行事を開催することが出来た。学年を越えた生徒同士の交流を持つことで、コミュニケーションが増し、普段生活の中で起こる問題や課題解決に繋がる良い機会となった。

居室移動等により生徒同士の交流の機会が増す一方で、就寝や起床への影響も少なからず出ており、より一層寮生一人一人の自主自律が問われる。今後もその部分の成長を促したい。

7.3.2　梓寮

新型コロナウィルスの５類移行に伴い、今年度は感染症対策を緩和しつつも、寮生には引き続き体調管理と感染症対策への留意を求めた。本年度は、１２月から２名（上海から１名、スリランカから１名）の留学生が寮生とともに生活をした。

今年度は、２学期にクリスマス会を行い、楽しそうに寮生同士で交流をしていた。また、３月には留学生の送別会も寮生が企画・立案のもと実施された。

早苗寮と同様に、寮生同士の関りが徐々に戻ってきている段階である。来年度は、より寮内での交流を促進させたい。

８．学外との協力・連携

8.1 保護者との連携（保護者の会）

本学院では保護者会を年に 2 度実施している。第 1 回目は 6 月初旬の土曜日放課後に開催する。1 年間の学習や行事に対する諸注意が内容の基本である。第 2 回目は 12 月の冬季休業に入った最初の日曜日に実施する。クラスや行事の状況報告、進級進学に向けた指導が内容の中心となる。3 年生では、ミスマッチのない学部選択に向けた進路指導のため、この保護者会においてクラス組主任との間で三者面談が行われる。

また保護者による組織として、本学院には「保護者の会」がある。PTA との違いは、保護者の会は、教員がその動きには基本的には関わらずに、会独自に活動していることである。保護者の会の活動は、保護者向けの広報誌の作成や卒業式関連のイベントの実施、また保護者同士の親睦を深めるための企画・実施等である。

8.2　卒業生との連携（同窓会・キャリア教育）

2022 年度に続き稲稜祭における出展や記念品グッズ作成、卒業生への就職セミナーを実施した。また、11 月 11 日に「早稲田大学本庄高等学院 40 周年記念ホームカミングデー」を実施した。本来は昨年に実施の予定であったが、コロナ禍により 1 年後ろ倒しでの実施となった。当日は 100 名を超える同窓生が参加した。

卒業生との連携としてはキャリア教育の充実が上げられる。凡そ月 1 度土曜日放課後に実施しているキャリアデザイン講座、毎年９月の２週に渡って実施するキャリアウィークでは、各界で活躍している OB/OG を講師として招き、職業について講義をしてもらっている。OB/OG にお願いする利点は、高校生活・大学生活が本校生徒とダブるために、どのような高校・大学生活を送り、どのように職業選択を行ったのかという時系列を自分のこととしてイメージしやすいことがあげられる。

8.3　地域との連携、貢献活動

本庄学院は 1982 年の開校以来、教員の持つリソースや学校設備・器具を用い、地域の人たちに対して講習会や特別講義を実施してきた。本庄キャンパス内に本庄プロジェクト推進室がで

きてからは、連携を行い、多様な講座を地域に公開している。

地域小学校への総合学習・国際教育支援
2018 年度より、教育委員会と連携し本庄市内小学校へ出張授業を行うプロジェクトが開始した。大きく一般的な授業内容を展開する総合学習支援プログラムと、留学生を軸に英語・国際理解活動を展開する国際理解支援プログラムに分かれる。
学校が学校だけで閉じている時代は終わり、多様化・グローバル化の時代の中、学校は教育リソースを学外に求めより効果的で高いレベルの教育を目指すとともに、地域の文化的拠点にならなくてはならないと考えている。

本庄市への協力
生涯教育を目的とした本庄市が主催する市民総合大学、こども大学ほんじょうにも講師・学長の立場で協力をしている。

学校独自のプログラム
本庄学院主催の子ども科学教室を行っている。従来は小学生親子対象であったが、今年度から入試広報戦略の意味を持たせ、募集対象を地域に限定せず、年齢を中学生まで拡大した。広く海外や近畿・東北からの参加者もいた。

河川研究班の活動
河川研究班は 2009 年より、本庄市内河川環境保護の活動をしている、本学院の有志団体である。2012 年からは、同じような活動をしている市内藤田小学校と連携し、年 2 回の河川調査と総合学習における科学教育指導、河川環境に対する啓蒙活動として 3 月に市民を対象として川のシンポジウムを開催している。

8.4　早稲田大学・附属校・係属校との連携
8.4.1　Waseda Affiliated Schools` Summit(WASS)の活動
2020 年より早稲田大学のもう一つの附属校である早稲田大学高等学院有志との間で WASS の活動を行っている。この活動は、両学院有志 10 名ほどが「より充実した学院生活」作りの案内をすることを目標としている。具体的には、大学教務部高大接続課の協力のもと、早稲田大学キャンパスツアー、早稲田祭における OBOG を招いてのトークセッション、より充実した学院生活作りに向けたワークショップを大学本部で 1 月 14 日（日）に実施した。
今後、継続校も含めて広く附属・継続校のプロジェクトにしたいと考えている。

8.4.2 地域創造ワークショップ
昨年度は本庄市を舞台として行った「町おこし」を目的とした起業ワークショップである。今年は、7 月 26 日～27 日に国分寺市を舞台として、早稲田実業を会場とし、早稲田実業と本学院が参加して開催された。

8.4.3　アントレプレナーシップ育成事業
早稲田大学アントレプレナーシップセンターでは、学生の起業家精神を涵養し、イノベーションを生み出す人材を輩出する教育に取り組んでいる。本庄高等学院においても、同センターや本庄市、今年度は日本政策金融公庫の協力を得ながら、高校生がアントレプレナーシップを身に付けるためのプログラムを広げた。スタンフォード大学d-school講師によるワークショップには本学院生徒だけでなく、高等学院・早稲田実業・早稲田高校の生徒も参加した。

- 6月28日（水）日本政策金融公庫との打ち合わせ（教員のみ）
- 7月15日（土）日本政策金融公庫によるビジネスプラン説明会
- 7月26日（水）～27日（木）地域創造ワークショップ＠早稲田実業
- 9月6日・9月20日（水）日本政策金融公庫によるビジネスプランワークショップ

・　12月13日（水）スタンフォードd.school講師によるデザイン思考ワークショップ
・　2月22日（木）WASEDA-EDGE Demo Day

早稲田実業における地域創造ワークショップ

8.4.4　オンラインによる国際部との連携講座「留学のススメ」

2018年度より大学国際部との連携で、特に大学進学後における留学への理解を進めるべく、特別講座を実施している。オンラインであれば保護者の参加も可能であり、対面とは異なる効果があることを感じている。本学院学務係から「高校における留学」、国際部国際課から「大学における留学」の説明を行ったのち、本学院のOBOGによる留学報告とパネルディスカッションを行い、最後に質疑をするという形式である。

2023年度は以下の通り実施した。2回とも150名ほどの保護者・生徒が参加し、関心の高さがわかる。

・　6月6日（火）19時～20時
・　11月6日（月）19時～20時

8.4.5　本庄早稲田の杜ミュージアムとの連携プログラム

本庄早稲田の杜ミュージアムは早稲田大学５番目の博物館として、同キャンパス内に2020年10月に開館した。本庄市近辺で発掘された考古学資料とともに、定期的に入れ替えながら早稲田大学所蔵の文化財をテーマ展示している。

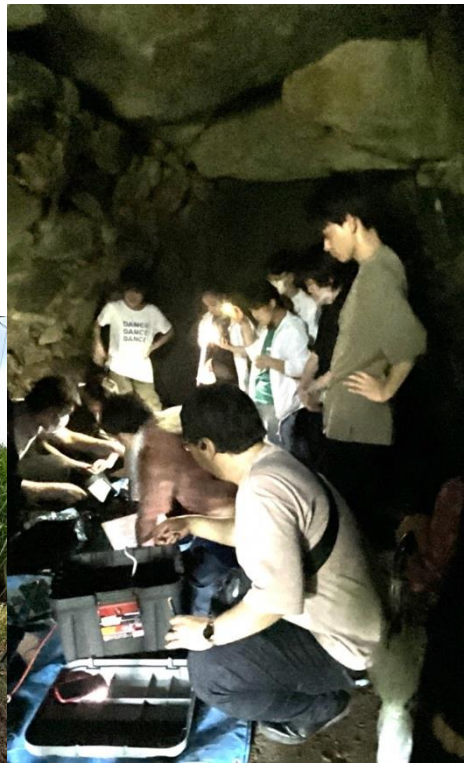
2021年度より、本校生徒が学芸員見習いとして休日に、博物館業務の手伝いをするプログラムを開始し、2023年度も継続した。業務は、市民に向けた埴輪作り・勾玉作り・土器洗いなどのワークショップの補助、展示物入れ替えの補助、お客様に対する説明ボランティア等である。

8.4.6　古墳の宇宙線探査「墳Q」

学院では、早稲田大学の考古資料館や本庄早稲田の杜ミュージアム、大阪大学、高エネルギー加速器研究機構、総合研究大学院大学、名古屋大学、山形大学の科学者や大学院生の方々と連携し、学校の周りにある古墳を宇宙線(宇宙から降り注ぐ放射線)を用いて内部を透視しようという「墳Q」プロジェクトを実施している。

2023年の8月9,10日に宇宙線透視装置OSECHI (Outreach & Science Education Cosmic-ray Hunting Instrument)を用いて、本庄市の秋山庚申塚古墳の2回目の宇宙線測定を行った。尚、この活動は山形大のウェブページや理学部だよりにも掲載されている。

https://www.sci.yamagata-u.ac.jp/news/detail/1070/
https://www.sci.yamagata-u.ac.jp/application/files/7717/0356/5103/rigakubu_dayori_171.pdf



左：古墳の外観での生徒と研究者の集合写真　　右：古墳内部での測定の様子

8.5　企業との連携

本庄学院では企業との連携プログラムを推進している。インターンシップにつながることと、学校で学んだ基礎知識を現場で実践する際の困難を経験することを期待している。

以下に、2023 年度実施プログラムの主なものを紹介する。

8.5.1　JR 本庄早稲田駅との連携プログラム「ほわフェスタ 2023」

本庄高等学院は昨年度、JR 本庄早稲田駅と連携し、JR 上越新幹線開業 40 周年記念式典「ほわフェスタ」をコーディネートした。今年度は JR 本庄早稲田駅開業 20 周年にあたり、開業 20 周年記念式典「ほわフェスタ 2023」をコーディネートし、11 月 10 日（日）10 時～14 時、本庄早稲田駅北側広場で開催した。

5 月より JR 本庄早稲田駅と多くのミーティングを重ねた。10 時から駅長、市長、学院長の挨拶の後、ダンス研究会、書道部、應援部、軽音部、ブラスバンド部のパフォーマンスが演じられた。また、本庄市南本町からは山車を出していただき、お囃子が演じられた。また、併設された JA 埼玉ひびきののこだま館直売所プチマルシェでは、JA との連携プロジェクトに参加している学院生がお手伝いした。

8.5.2　ほんじょうFM

2021年度より、地域ラジオ局であるほんじょうFMで、毎週木曜日17時～17時45分、「くまごじ」のパーソナリティを務めている。本校のPR、生徒のキャリア教育に役立っていると考えている。

8.6　募金

2023年度の教育振興資金寄付件数は74件、寄付金額は14,630,000 円であり、その他にも本庄高等学院指定寄付や部活動指定寄付を32件、3,143,047 円を受け入れた。

今後も引き続き、さらなる募金獲得に向けて今まで以上に幅広く活動を行なう必要がある。

９．管理運営

9.1　教員

9.1.1　教諭会

本年度は全て対面で定例教諭会が11回（入試判定会、卒業・進級判定会は除く）、臨時教諭会が14回開催された。コロナ改善の状態に戻ったと考えられる。

会議で実施した。なお、臨時教諭会には生徒指導を議題とする会議が複数回含まれる。

9.1.2　各種研修

教員には各種研修が義務付けられている。

情報セキュリティセミナー・ハラスメント防止セミナー・学術研究倫理セミナー・ダイバーシティ＆インクルージョンセミナーをまとめた教職員セルフマネージメントセミナーはオンライン上で試験の形で、全問正解の合格が義務付けられている。

2023年4月にハラスメント防止研修会を非常勤講師ガイダンスと同日開催、専任以外の教員も含め、ハラスメント防止等について再認識していただくこととした。

9.2 委員会

2021年度は、それ以前の委員会活動の反省を含め、昨年に続き大幅な改編・統廃合を行ない、校務分掌のスリム化、教員の業務量の軽減化を目指した。以下に、各委員会の検討事項及び取り組みを紹介する。おおよそ、一人の教員が2委員会を兼ねることになる。

| 委員会 | 構成 | メンバー |
|---|---|---|
| 教科主任会　委員長：教務担当教務主任 | 教員８、教務２、職員３ | 教科主任、教務担当教務、事務長、職員 |
| 学年主任会（奨学生、生徒表彰選考）＊委員長：教務 | 教員３、教務１、職員１ | 学年主任、生徒担当教務、養護教諭、事務長 |

| | | |
|---|---|---|
| 生徒活動支援委員会・人権教育委員会（生徒会・稲稜祭・生徒指導、いじめ防止委員会兼務）＊委員長：教務以外 | 教員 8、教務２、職員１ | 各学年２、組主任外 3、生徒担当教務、職員 |
| 安全委員会（体育行事、保健、その他安全配慮）<br>＊委員長：教務以外 | 教員 8、教務１、職員１ | 体育 5、養護 1、全教科 3、生徒担当教務、職員 |
| 寮委員会＊委員長：寮主任 | 組主任外、教務２、職員１ | 組主任外 養護教諭１、寮主任２、生徒担当教務２、職員 |
| 広報・出版委員会（杜・紀要）＊委員長：教務 | 教員　１、教務１、職員１ | 全教科１、教務１、職員 |
| ●入試委員会<br>＊委員長：入試主任 | 教員 8、教務１、職員２ | 全教科１、入試主任、教務担当教務、職員 |
| 進路指導委員会（各種セミナー、卒論報告会）<br>＊●委員長：教務以外 | 教員 8、教務１、職員１ | 各学年２、組主任外 3、教務担当２、職員 |
| ●留学・海外交流委員会<br>＊委員長：教務以外 | 教員 8、教務１、職員２ | 全教科１、英語１、教務担当教務、職員 |
| 図書委員会 | 教員１、教務１、職員１ | 司書教諭１、職員 |
| 学校評価運営委員会<br>＊委員長：教務以外 | 学院長、教務、職員１ | 学院長、事務長 |

※　●は２年継続

9.3　教科別教員構成

教員の教科別・年齢別・男女別構成は次の表の通りである。

| 教科 | 専任教諭 | 非常勤講師 | 合計 |
|---|---|---|---|
| 国語科 | 6 | 4 | 10 |
| 地理歴史・公民科 | 7 | 15 | 22 |
| 理科 | 5 | 9 | 14 |
| 数学科 | 7 | 4 | 11 |
| 保健体育科 | 5 | 5 | 10 |
| 芸術科 | 1 | 4 | 5 |
| 英語科 | 8 | 9 | 17 |
| 情報科 | 1 | 4 | 5 |
| 家庭科 | 1 | 1 | 2 |
| 第二外国語 | 0 | 4 | 4 |
| 養護 | 1 | 0 | 1 |
| 合計 | 42 | 59 | 101 |

9.4　持ち時間数

23 年度の教員の平均授業担当時間数は次の通りである。22 年度から大きな変動はない。

1. 専任教員　14.2 時間（ 除長期欠勤者・特別研究期間適用者・養護教諭）
2. 役職者以外　15.1 時間
3. 役職者（教務）　8.2 時間
4. 非常勤講師　5.5 時間

9.5　教員構成

9.5.1　年齢別構成

| 資格 | 人数 | 21～ 30 歳 | | 31～ 40 歳 | | 41～ 50 歳 | | 51～ 60 歳 | | 61～ 70 歳 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 人数 | 比率 | 人数 | 比率 | 人数 | 人数 | 人数 | 比率 | 人数 | 比率 |

| | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 専任教諭 | 42 | 0 | 0% | 9 | 21% | 17 | 40% | 6 | 14% | 10 | 24% |
| 非常勤講師 | 59 | 29 | 49% | 2 | 3% | 6 | 10% | 12 | 20% | 10 | 17% |
| 全体 | 101 | 29 | 29% | 11 | 11% | 23 | 23% | 18 | 18% | 20 | 20% |

9.5.2　男女別構成

| 資格 | 人数 | 男 | | 女 | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | 人数 | 比率 | 人数 | 比率 |
| 専任教諭 | 42 | 32 | 76% | 10 | 24% |
| 非常勤講師 | 59 | 42 | 71% | 17 | 29% |
| 全体 | 101 | 74 | 73% | 27 | 27% |

9.6　事務組織

事務所には、事務長の他、庶務係に専任職員３名、派遣社員２名が、学務係に専任職員２名、嘱託職員１名、派遣社員２名が配置されている。他に、理科室に実験助手（嘱託）２名がいる。

専任および嘱託職員の嘱任、解任、配置転換は大学が行い、派遣スタッフについては大学が契約窓口となり、人材サービス会社から派遣されている。

なお、施設の管理、スクールバスの運行管理、図書室の運営については業務委託を行なっている。

9.7　生徒の出欠席・成績処理

生徒の出欠席・成績管理のために、早稲田大学オープンソースソフトウェア研究所が開発した学院向け教務システム「SchoolN@vigator[6]」を導入している。同システムはリレーショナルデータベース化による情報の一元管理を特長とし、高度なセキュリティ保持や容易なデータ抽出・加工が可能になった。ユーザーインターフェースとしてウェブブラウザが採用されていることも、操作性や利便性の向上に役立っており、特に教員についてはデータの閲覧・編集がインターネット環境さえ整えばどこからでも可能になっている。

今後は、生徒の保健管理や課外活動管理などシステム化されていない事項を含め、ユーザーの希望を取り入れながらシステムの改善に取り組みたい。具体的な運用は以下の通りである。

- 出欠席管理：科目担当者（教員）が毎時限の出欠席を入力した後、学期毎に組主任が欠席理由、成績通知表用所見を入力する。その他、学校行事など出欠席の一括入力が必要となる例外対応や集計処理は職員が管理する。
- 成績管理：科目担当者が生徒の成績を入力した後、チェックから確定処理までを教員が行なう。成績通知表・指導要録・調査書等の成績関連帳票の自動出力が可能となっている。進学学部への調査書提出時など一括処理やデータ集計が必要な部分については、職員が編集・管理を行なっている。

9.8　教育実習

2 週間（5 月 22 日（月）～6 月 1 日（木））および 3 週間（5 月 22 日（月）～6 月 5 日（月）・13 日（火）～14 日（水）、保健体育のみ 5 月 29 日（月）～6 月 5 日（月）・8 日（木）～16 日（金））の期間で 15 名の実習生を受け入れた。実習前の打ち合わせ会は 4 月 27 日（木）に行った。実習生は教壇実習を行いながら、学校現場の業務の体験に努めた。実習期間中には体育祭や学年行事（学部説明会等）を実施して学校行事運営の実習も行った。教育実習の反省会は 2 週間および 3 週間の実習最終日にそれぞれ実施した。実習期間中に新型コロナ感染対策のための臨時休校があり、実習期間が急遽変更となる事態が発生したが、実習生には柔軟に対応してもらい、無事実習を終了することができた。

[6] 本庄高等学院用の出欠・成績管理システムである。各担当教員がその都度生徒の出欠や成績を入力し、その内容が指導要録・調査書等に自動的に反映される。

9.9　広報・連絡

9.9.1　学校活動の広報

広報誌として『緑風』と『杜』を発行している。

『緑風』は本庄高等学院の発行する広報誌で、6 月と 12 月に発行している。紙面は教員や生徒が執筆するコラムや行事報告、クラブ活動の戦績報告などで構成されている。

『杜』は保護者の会「杜」編集委員会が年 1 回発行する保護者向け広報誌である。同委員会の自主的な取材・編集により、学院施設や生徒行事・トピックの紹介、保護者の会の活動報告などを掲載している。

オンラインでの広報は、学院ウェブサイト（https://www.waseda.jp/school/honjo/）を主なツールとして使用している。ウェブサイトでは学院生活に関するニュースや出来事を継続的に発信しており、
トップページの写真やリード文を見るだけで、本学院の最新の動向が伝わるようなページ運用を行っている。

課外活動のページでは、部活動ごとの活動概要（部員数・活動日・実績）を伝えるとともに、独自の Web サイトがある公認団体（クラブ）は、団体独自の情報発信を行なっている。こちらについては更新作業が実情に追い付いていかないという難点がある。

今や ウェブサイトは、学外の方に学校の基本的な情報、必要な手続・書式を得てもらう必須のツールとなっている。入試についても例外ではなく、本学院では入試の出願、合格発表、入学手続きの全てをウェブサイトを使用して実施している。

正確かつわかりやすい情報発信はウェブサイトの必要条件であり、このことに向けての体制づくりは今後も継続的に検討していく必要がある。ウェブサイトの必要性とそこにタイムリーさが求められることは重々承知していても、なかなか更新が追いつかない現状がある。

9.9.2　保護者・生徒への連絡・広報

本学院保護者に対して、迅速かつ確実に情報を伝達するため、FairCast（NTT データ(株)提供）システムを導入し、基本的に保護者のメールアドレスを登録している。災害・緊急時の情報伝達のみでなく、日常の事務連絡にも用いることで、保護者への迅速な情報発信を行なっている。

生徒に向けての連絡は、通常はLHRや授業時に行うことで問題ないが、警報発令時の連絡、台風通過後の学校からの連絡、生徒達に配布している学校生活マニュアル集「学院生活のしおり」によらない緊急連絡などはWebサイトを使って発信・連絡している。特に、2020年3月2日以降の一斉休校以降における、新型コロナウィルス感染拡大に伴う学校からの様々な情報提供はすべてWebサイトを用いてその都度こまめに行い、なるべく生徒・保護者の不安を解消することを目指した。

9.9.3　学校に寄せられる情報

学校に寄せられる情報としては、以下の種類がある。

- 警察・消防署・本庄市からの情報不審者や災害状況などに対して注意を喚起する情報が寄せられることがある。必要に応じて、生徒に下校時の注意などを呼び掛けている。
- 市民・公共交通機関利用者等からの情報市民の方、電車の乗客の方から、主として生徒に対する苦情が寄せられることがある。状況を詳しく伺い、必要があれば生徒に注意を与えるとともに、ご指摘いただいた方に対しては真摯に対応するように努めている。

10. 学校評価

この学校自己評価については、2023年3月に項目ごとに担当者を割り振り、原稿を依頼した。保護者に向けたアンケートは実施できなかったが、学校運営に対する意見・感想を伺う場を保護者会のあとに役員から聴取することができた。

10.1　自己評価

早稲田大学の各箇所は毎年次年度計画と実施報告を大学にすることが義務付けられている。以下は、2023 年度 Waseda Vision150 会議への本庄高等学院の報告として大学へ提出した内容か

らの引用である。

10.1.1　2023 年度自己評価の主な内容

(ア)　入試関連

・　2024 年度入試に向けて

　2020 年度以降の入試改革で実現した、一般入試・帰国生入試における願書の Web 化、2 次試験（面接）の廃止、入試会場の一本化（早稲田会場のみ）等を引き続き実施した。

・　入試広報の効果的展開

　学校説明会については、海外を含む遠方からの参加を容易にし、かつ新型コロナウイルス感染症対策の一環として、オンラインにより実施した（第３回目は対面・オンライン併用）。効率よく学院の特色や入試情報を伝えるとともに、在校生や留学生も積極的に協力することで、高校生活を身近に感じられたと考える。また、生徒寮の情報や相談の場を提供し、親元を離れての様々なバックグランドをもった生徒との共同生活の雰囲気も感じていただくことができた。

(イ)教育関連

・　カリキュラム改定

　第 1 学年および第 2 学年は新学習指導要領に則ったカリキュラムとなっている。コロナ禍中に積み重ねたオンライン教材や LMS（ラーニング・マネジメント・システム）等のリソースは、ポストコロナにおける教育の ICT 化に活用されている。

・　卒業論文指導の強化

　第 2 学年から取り掛かる長い探求活動の中で、卒論指導とともにライティング、プレゼン教育についても注力した。また、対面による卒論報告会を再開した。 今後、高大連携や地域連携による課外活動等を通じて関心を持ったテーマなど、さらに多角的な課題設定も期待される。

・　学部推薦選抜制度の充実

　高大接続の一環で、ミスマッチがなくモチベーションの高い生徒を学部に推薦することを目指し、学部との教育活動の連携や情報交換を密にし、生徒がそれぞれの学部・学科への理解をより深いものにできるよう努力した。大学キャンパスでの対面による学部説明会を実施した。また、第一線で活躍中の社会人等も交えてのキャリアデザイン講座を実施し、学部で何を学ぶか・どんな未来を描くかをイメージできるよう、進路指導の充実を図った。

　日本医科大学の学校説明会は５月には３年生対象、９月には１，２年生対象の説明会を日本医科大学で開催した。説明会では学校の紹介に加え、模擬講義等を実施するとともに、医学の道を志すうえでの心構え等の指導も行った。

・　地域連携プログラムの充実

　地元小学校との交流事業（総合的学習の支援）、本庄早稲田の杜ミュージアムでのワークショップ支援、ほんじょう FM での番組企画・出演等を実践した。とりわけ地元小学校との合同河川調査については、長年の継続的な取り組みが評価され、河川エビの研究及び図鑑「ほんじょうの川のいきもの」発行の活動が「川の日ワークショップ 2024 関東大会特別賞」を受賞した。

・　企業連携プロジェクトの推進

　企業との連携プロジェクトは、本学院が推進しているアントレプレナーシップ教育に役立つとともに、学校で学んだことの実践の場として経験や技術を深めることに繋がり、社会の抱える問題を知ることになるため、今後とも継続していきたい。

(ウ)国際関連

生徒の海外留学・海外派遣

2018 年度に、1 年間留学をしても高校 3 年間で卒業できる「第 2 種留学」制度を作った。2020 年度からのコロナ禍で留学希望者が減少したが、本年度はこの「第 2 種留学」により１名、また従来の「第１種留学」により２名が１か年の海外留学に旅立った。

国際化の動きの中、本学院も NZ の短期留学環境づくりなどの対応を進めている。

留学生の受け入れと留学期間中の支援

留学生の受け入れ数とそれぞれの活動の様子については、16p2.5.3 留学の項に詳細を述べた。留学生の学習支援には早稲田大学への指定寄付を原資とした「荻野奨学金」を活用し、学院生をも巻き込む形で留学生の滞在中の体験を増やす努力をしており、大学内でも活用の優秀事例として紹介されている。

大学進学後の留学促進

国際化が進み、早稲田大学も留学を進めている現在、生徒一人一人が大学生活をイメージするとき、留学は必ず検討すべきプログラムとなっている。特に、就職活動を考えた時、２年次の夏に留学することが求められ、そのためには大学入学後すぐの準備が必要となる。

このようなことを考え、大学進学後の留学を視野に入れている生徒、保護者向けに、国際部・留学センターとの連携による留学説明会を、2021 年よりオンラインにより実施している。150 名を超える保護者・生徒が参加しており、関心の深さを感じさせる。

修学旅行

2023 年度はコロナ禍以前の海外修学旅行を復活させるには至らなかった。が、8 月に韓国の安養外国語学院、10 月には台湾の台中市立台中第一高級中学の下見を兼ねた表敬訪問を行い、2024 年の修学旅行訪問を約束した。

国際交流プログラム

SSH 指定校時代に培った NJC、MWIT との相互訪問プログラムを進めるとともに、IICC、JSSF、SISTEMIC、ICRF などのコンテスト・発表会にも積極的に参加した。また、MWIT とは MOU の締結を行った。

国内外教育機関連携でのオンライン学習交流プログラム

オンラインの国際関連プログラムは、コロナ禍でも留学や国際交流の意義を伝え、モチベーションを維持してもらうために、組まれた背景がある。アフターコロナの現在も、いくつかのオンラインプログラムが動いている。

- 特に新入生に向けて国際交流の良さを伝えるために、ミニシンポジウム「国際交流へのいざない」を３月に開催した。
- 韓国セロナム高校との学術交流シンポジウム（オンライン）を開催した。合同で 6 つのグループを作り、SDGs の各テーマについて、日韓の比較と問題解決についての提言を目指し、５か月間の共同研究を行いました。12 月には最終目標であった国際フォーラムを ZOOM で開催した。
- 台湾高雄市立高雄高級中学との間で「グッピーの求愛行動」に関する共同研究を行い、 11 月に開催された国際高校生科学シンポジウム Japan Super Science Fair（JSSF） 2023 及び 1 月に開催された International Collaborative Research Fair2023（オンライン）で共同発表を行った。
- 姉妹校である Singapore National Junior College(NJC)と 2022 年秋から共同研究を行い、7 月の NJC における人文科学発表会で発表した。

10.1.2　2025 年度計画

（ア）入試関連

・ 願書の Web 化と 2 次試験（面接）の廃止、試験会場の一本化等の影響を分析し、2024 年度入試に活かすとともに、全国・世界から多様で資質の高い生徒を受け入れるため、引き続き入試改革に取り組む。

・ ポストコロナにおいても対面に加え、オンラインでの展開を含めた学校説明会や相談会を開催し、地方や海外から多くの受験生が参加できるようにする。また、地元指定校向けの説明会や出前講義にも対応する。早苗寮（男子寮）と梓寮（女子寮）の魅力作りを進め、ＰＲ方法も工夫する。

（イ） 教育関連

・ 多様で資質の高い生徒を受け入れる環境の充実

学びの環境をさらに整備し、生徒同士が議論し、互いに啓発し合えるラーニング・コモンズ的なスペースが必要である。そのため、校内施設の有効活用策を検討した結果、現在デスクトップパソコンがある２つの教室から、パソコン室を取り除き、オープンスペースとして活用することとした。また、親元を離れても、安心して充実した学院生活を送ることができる寮を目指し、寮内での談話スペースの確保や独自の地域連携プログラムなど、引き続き魅力的な寮の在り方を工夫する。

・ 教育効果の高いカリキュラムの検討・多様で未来的な教育プログラムの展開

2022 年度からの新学習指導要領実施に伴い、新カリキュラムの整備・点検を継続的に行ってきた。この中では、学部の意見を伺いながら附属のアドバンテージとなる、あるいは学部教育にシームレスに接続できるような授業展開も検討する。

また、コロナ禍中に得た、教育のオンライン展開などで積み重ねた経験とリソースを活かし、自習課題の充実や、遠隔授業の充実などを図る。

地域連携（貢献）・企業連携・国際交流・研修活動・各種コンテスト参加など多様なプログラムで、本庄学院教育の可能性を広げ、入学した資質の高い生徒の能力や知的好奇心を育成するよう種々の行事を実施する。

・ ミスマッチのない学部進学と将来設計を目指して

従来の進路指導のあり方を改め、大学生活や将来を総合的に考えた上で、学部選択・留学・就職を考えられるような進路指導を行う。具体的には、学部との教育活動の連携や情報交換を進め、学部説明会のあり方を検討し、キャリア教育同窓会や校友会との有機的な連携も図り、種々の課外講義を実施する。日本医科大学への学校推薦制度については、高等学院、早稲田実業とも連携のうえ、キャンパスツアーや医学系の模擬講義等を充実させる。

・ 卒業論文を軸とした論文リテラシー教育の充実

新カリキュラム導入に際し、論文リテラシー教育をうまく組み込む努力を行うとともに、どの分野の論文でも必要となるであろう統計処理やデータサイエンスに関するコンテンツを導入する。

・ 高等学院との有機的な連携と附属生としてのアイデンティティ育成

高等学院との、今までの連携プログラムを成長させるとともに、新たな協働連携プログラムの検討も進め、附属校生としてのアイデンティティ育成にもつなげる。

（ウ） 国際関連

・ 留学の促進

1 年間留学をしても高校 3 年間で卒業できる「第 2 種留学」制度や、Education New Zealand（ENZ）との留学協定を活かし、本学院から海外に羽ばたく生徒の増加をめざす。特に ENZ では個人の目的に沿ったフレキシブルな留学内容がカスタマイズできることが魅力で、その効果が期待される。

・　受入留学生へのプログラム充実
　本学院で受け入れる留学生についても留学中の教育プログラムの充実を検討し、留学生のみならず本校生徒にとっても得るものの多いような形態を目指す。

・　ポストSSH・SGHのプログラム
　本学院には、長いSSH・SGH期間中に培われた経験と国内・海外校とのネットワークがあり、SGH後も国際プログラムをどう継承させていくかの検討を継続する。これまで実施してきたMahidol Wittayanusorn School（タイ）、National Junior College（シンガポール）、Hana Academy Seoul（韓国）、蘇州中学（中国）との生徒訪問・受け入れの交流については、コロナ禍で一旦オンライン化あるいは停止されたが、対面での再開に向けて努力する。これらの学校との連携については、国際シンポジウムの開催等を含め、未来的な国際交流のスタンダードとなるようなプログラムを双方で検討したいと考えている。

10.2　2023年度学校評価関係者・第三者評価会記録
10.2.1　概要
日　時：2024年5月11日（土）　14:00-16:00
参加者：
評価委員（五十音順、敬称略）
・　黒岩　智絵子（卒業生保護者、草津町教育委員会委員）
・　小林　清木　（埼玉県私立高校元校長）
・　鈴木　啓太（本庄プロジェクト推進室副室長）
・　鈴木　健一（2023年度　保護者の会会長）

本庄高等学院
・　半田　亨（教諭、学院長）
・　影森　徹（教諭、教務担当教務主任）
・　峰　真如（教諭、教務担当教務副主任）
・　進藤　卓（事務職員、事務長）
・　井崎　健人（事務職員）

10.2.2　学校関係者評価・第三者評価
【実施方法】
・　学校自己評価報告書について、開催日から約2週間前に委員に事前配付した。
・　当日は影森教諭がパワーポイントを用いて学校自己評価の章ごとに説明を行い、それぞれの内容について質疑応答・意見交換を行った。
※紙面の都合上、本議事録には当日の学院からの説明は割愛し、質疑応答・意見交換の内容について、以下に記載する。

【教育理念】
・鈴木（啓）委員より以下の発言があった。
- 創立して40年以上が経過した本学院の教育理念について、学院が続けてきた教育内容を反映した教育理念を学院の教諭により是非言語化してほしい。その言葉はおそらく100年経っても滅びることはないだろう。
- 本庄キャンパスの活用方法の検討にあたり学院の1期から10期ぐらいのOBと話をすることがあるが、普通の学校と異なると感じる。是非、そういったものを表してほしい。

　これに対し影森教諭より、50周年事業を行うための委員を組織し、そこで検討していく旨の発言があった。

・小林委員より以下の発言があった。

- 学校の教育理念について、核となるものとしての理念は大切である一方で、どうしても形式的なものになりがちであり、重要なことはリーダーがその理念をきちんと意識することである。
- 教育理念は他の学校のものと似たようになりがちだが、そのことを気にする必要はなく、スタッフが具体的に何をやるかが大事である。
- これまで多くの学校の運営に関わってきたが、その際には早稲田大学と関係のない学校であるにも関わらず、進取の精神、学の独立等、早稲田大学の理念がキーワードとなっていた。閉ざされた空間に押し込まれていては社会性が育たず、電車のつり革広告に触れるなど、社会の色々な人・物に触れて通学することで得る学びも多い。

【教育活動】

・鈴木（健）委員より以下の発言があった。

- 部活動と授業のバランス等、考慮すべき点があるとは思うが、運動部に限らず文化部も含め、全国大会に出場するような強い部活があると愛校心が強くなるのではないかと思う。

これに対し、学院からの出席者より以下の発言があった。

- コロナの影響かは分からないが、運動部に入る生徒が大きく減少しているという実態がある。その中でも負荷の大きい運動部に入る生徒が減り、比較的負荷の小さい運動部の人数は増えている。
- 授業とのバランスの他にも、学校における働き方改革と部活動のバランスも考えていく必要がある。

【生徒への配慮】

・黒岩委員より以下の発言があった。

- 早稲田大学はジェンダーへの対応について大々的に打ち出している印象がある一方で、学院についてはこの点への対応が分からなかった。注力していることを対外的に打ち出すことで受験生も安心して受験に臨めるようになるのではないかと考える。

これに対し学院より、学院生活のしおりへの記載、研修の実施、リーフレットによる啓蒙活動を行っていることの紹介があった。一方で対外的には十分に示せていないので、今後、広報においてこの点も検討していく旨の発言があった。

【生徒進路（日本医科大学との連携）】

・小林委員より以下の発言があった。

- 群馬や埼玉県北部には医学部に行かせたいというニーズが大きいと感じている。将来医学部に進学することを目指し、これらの地域からわざわざ都内の高校に通学する家庭もあり、学院から日本医科大学への推薦枠ができたことについては、それらのニーズに応えられるものであると考える。

・黒岩委員からは以下の発言があった

- 早稲田のイメージとして「医学部がない」というものがあるが、日本医科大学との連携はこのイメージを多少払拭するうえでも良いことだと思う。

10.2.3 関係者評価会・第三者評価印象

今年度の関係者会議でも、資料の事前送付および当日の PPT 等を使用した説明により、効率的に本学院の説明を行うことを心掛けた。また、校長等で高校教育歴の長い小林委員、中学校教育や地域プログラムに詳しい黒岩委員のご協力を仰ぐことができ、積極的かつ忌憚のない意見を伺うことができた。いただいた意見は今年度以降に活かしたいと考える。

10.2.4 最後に

今更言うまでもなく、学校教育は生徒と教員のみで成り立つものではなく、学校を構成する生徒・教職員・保護者そして地域、すべてが重要な要素である。これらが協力し、１つの理想に進むことで良い教育が実施できるようになる。

これも今更言うまでもないことであるが、「良い学校」を作るためには、現状の良い点・悪い点を客観的に評価し、良い点を強化し、悪い点を謙虚に改めて行く姿勢が重要である。

残念ながら、学校という社会は、一般企業と異なり、外部からの視点で客観的な評価をすることが難しい。事なかれ主義に徹して、保守的に従来の在り方を継承してもなんとか問題なく過ごすことができてしまう。

しかし、世界的にグローバル化が進み、教育内容や生徒・保護者の意識が多様化し、レベルの高い教育を求める層が増えている中、それでは学校として競争に勝つことができず、資質の高い生徒を獲得することができない。また、2020 年から始まったコロナ禍では大きく学校の底力が問われた。ポストコロナとなる現在は、コロナ禍における遺産をどう活かすか、コロナ禍で失われたものをどう取り戻すかが問われている。

このような現状を考え、ここに改めて周囲の厳しい声に謙虚に耳を傾け、より良い学校づくりに活かしたいと思う所存である。ご多忙中にもかかわらず長い本文をお読みいただき、ご意見をいただいた評価委員の方々にこの場を借りて、学校を代表し心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。

以　上